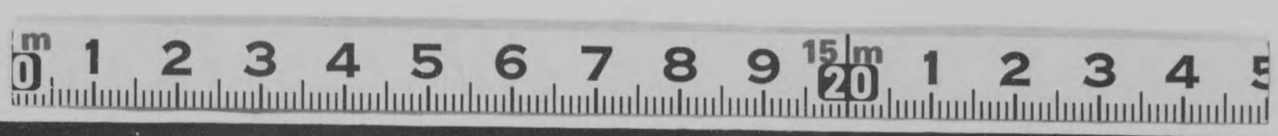


392
65

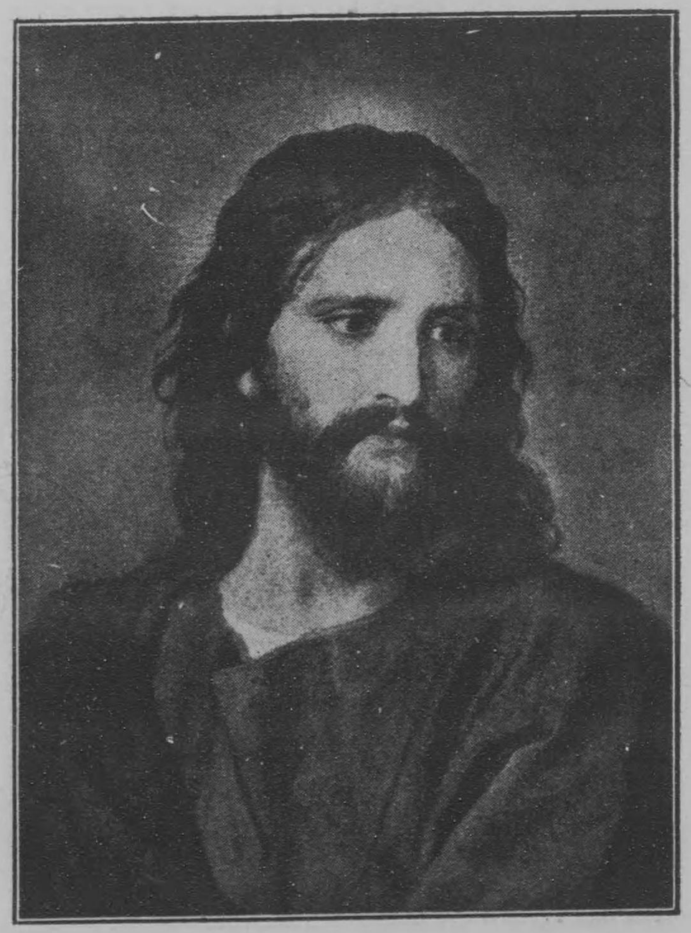
392-65

帝國圖書館藏

史的研究 赤裸々の基督

文學士 大野法瑞 著

大正
8. 12. 25
内交



ホフマン筆

序

基督の如き偉大なる人格を論述するは、識見高く學殖に富むものにして、始めて克く成し得る事業なり。余の如き今猶ほ修養研鑽の途に在る者にして敢て之が編述を試むる、抑自ら僭するの甚しきものと謂ふ可し。然れども翻つて思ふ、世の基督を說く書其數は多しと雖も、或は神學者の筆になり、或は文學者の筆になり、竟に傳承的神話にあらずんば架空的小說に終れるもの多し。其純乎料學者として叙述せる邦語の良書に至つては、初學の士の之を求めて得ざるを歎ずる久し。然らば則ち此書の如き簡にして粗なりと雖も、又以て是等の人士に益するところなしとせざるべし。是れ余が敢て之を刊したる所以なり。

本書は歷史的批評の立場より叙述せる學術書なり。されば歷史的事實と想像的傳說とは明劃に區別せんと力めたり。然れども其單に傳說に過ぎざればとて、全然之を棄

棄して顧みざりしにはあらず。むしろ史學の研究法に仍り、傳說の傳說的價値は十分之を認め却つて保存せり。而して後史的批判に訴ふる法則を以て、略全篇を一貫したり。是れ史學を專門として攻究せる余の持論にして、やがては本書の特徴とも謂ふ可し。其全體の結構に關しては、博く世の識者に敎を仰ぐを欲するところなり。

大正八年十二月

著者識

目次

第一章　緒論……（一）
第一節　研究の史料……（一）
第二節　研究の發達……（六）
第二章　ユダヤ……（一三）
第一節　ユダヤの歴史……（一三）
第二節　ユダヤの宗敎……（一七）
第三節　メシヤの觀念……（二三）
第三章　ヨハネ……（二九）
第一節　イエスの先驅……（二九）

第三節　ヨルダンの洗禮……（三三）
第四章　イエス……（四四）
第一節　超自然的出生……（四四）
第二節　幼時と出身……（五二）
第三節　受洗と試惑……（五七）
第四節　傳道と使徒……（六三）
第五章　福音……（七〇）
第一節　神國の宣傳……（七〇）
第二節　メシヤの自覺……（七八）
第三節　神の觀念……（八六）
第四節　祈禱と教訓……（九〇）

第六章　奇跡……（九八）
第一節　傳說の奇跡……（九八）
第二節　奇跡の說明……（一〇六）
第七章　論評……（一一一）
第一節　民衆の態度……（一一一）
第二節　パリサイ派……（一一七）
第三節　決戰の上京……（一二三）
第八章　受難……（一三三）
第一節　難問と就縛……（一三二）
第二節　審問と磔刑……（一四五）
第三節　復活の信仰……（一五七）

——終——

史的研究

赤裸々の基督

第一章　緒論

第一節　研究の史料

新らしき時代には復た新らしき筆を以て書かれねばならぬ。併し事實のところ、基督の傳記を時の順序を追うて一々記述するは全く不可能のことである。福音書の記事は材料を事柄によつて排列した傾向があつて、多くの點に於て殆ど超時間的である。それに福音書相互の間に多少の相違があるから、其中より正しき順序を探りあてむことは望むべきでない。それ故所謂『耶蘇傳』又は『基督傳』は不可能である。尤も大體の

經過は幸にして福音書によつて知り得るのである。

イエス（Jesus）の人格と事業とに關する資料は決して豊富でない。彼れ自らは何物をも書き遺さなかつた。又他人によつても己が記念を、不朽ならしむる手段を講じなかつた。イエスがローマの歴史家の筆に上つたのは、やつと第二世紀前半のことである。尤も是れとて史家タキツス（Tacitus）がネロ（Nero）帝の基督教徒迫害を叙するに當つて、この有害なる迷信の開祖クリスト（Christ）はチベリウス（Tiberius）帝の御代に處刑せられたと、只一言彼れに說き及んだに過ぎない。第二世紀の半に至り、始めて哲學者ケルズス（Celsus）は、イエスを大工の婚約の婦人がローマの兵士と密通して出來た私生兒だと書いて、基督教の攻擊を試みた位のものである。

轉じて基督教會内に屬するものを見ると、初代基督教の弟子等は、イエスの事蹟傳記を宣べ傳へるを以て傳道と心得、その傳記を稱して福音（ゴスペル）（Gospel）と呼むだ。一般信徒もイエスの傳記を聞くを無上の喜びとし、口より口に之を傳へ、相集り相會する

毎に互に語り合つて、何物にも優れた興味を感じて居た。是等の所謂福音書は、新約全書に載つて居るもの丶外に猶ほ多く弘まつて居た。併し今日傳はつて居るそれ等の斷片を見ると、奇怪の記事のみが多くて、史料として採用するに足るものは極めて少ない。であるから吾人は新約全書に入つた福音書に於てのみ、史學上價値ある研究材料を求めねばならぬ。

併しながら是等の福音書を史料として用ゐるには、種々の批判と綿密なる注意とを要する。新約全書に載つた福音書は四つある。その中で第四の通常約翰（ヨハネ）（John）福音書と呼ばる丶ものが、他の三つと甚だしくその内容を異にして居ることは、誰の眼にも直ぐ映ずることであらう。然もその相違は單に部分的枝葉的でなく、全體的及根本的である。約翰傳のイエスの人格を說明するや、他の三傳に比較して基だ高尚雄大である。著者は天外幽玄の界から來つて、又よく人情の機微を有した。其の神性を明かにし其の奥義を傳へたる、到底他の諸傳の遠く及ぶところでない。隨つて此書は從來

他の三福音書よりも遙かに貴重なるものであるとせられて居た。然るに研究の結果此書は他の三傳よりも後世の作であることが明かになつた。夫れにこの傳の主眼はイエスの言行そのものでなくて、彼れに對する著者の意見若くば信念である。無邪氣に過去の事實を語るといふ態度は全くない。その目的は語らむよりは寧ろ敎へむとするにあつた。であるから約翰傳は吾人の信念を磨く上に於て益するところは大であるが、イエスを歷史的に解するといふ點に於ては信用が出來ない。從つてイエスの人格及び事業の史料としては、吾人は此の第四福音書を全く棄てねばならぬ。

他の三福音書即馬太（Mathew）傳、馬可（Mark）傳、及び路加（Luke）傳は並べて共に觀るべきものであるので、通常共觀福音書（Synoptic Gospels）と呼ばれる。然るに此三書は內容に於て、互に甚だしき類似と一致があると同時に、また多少の相違がある。三つの中最も古いのは何れであるかといふ議論は、一八三八年ヘルマンワイゼ（Hermanweise）の主張によつて終決した。それによつて今日は第二の馬可傳が最

も古いものとせられて居る。他の二書は之を基として作られたものである。而して夫れ等の材料はイエルサレム（Jerusalem）の原始敎會か或は直弟子等から得て來たものである。從つてイエスに關する史料として少からぬ價値を持つて居る。勿論是等の福音書とても、傳記又は歷史書たる目的を有したものではない。彼等の目的は宗敎的であつて、其の著書は史書よりは寧ろ傳道書であつた。彼等はイエスに對する信仰を養はんが爲めに筆を執つたのである。從つて吾人が今日歷史的事實と稱するものを彼等は重んじたのではない。彼等に取つては、イエスに對する信仰を强むるやうな事柄が、最も價値ある材料であつたのである。夫れ故彼等から材料の史學的取捨排列を期待するは無理である。從つて福音書の記事には史的事實ならぬものが少くない。といつて夫れを著者の故意の製作とするは愚かな解釋である。彼等は夫れ等を悉く事實だと信じたのである。當時の人々には心情の奇跡は、同時に外界の奇跡と現れた。彼等は自ら事實と信せるがまゝに語つた。自ら與へられた材料を支配するよりは寧ろ夫れ

等に支配せられた。從つて自分の信仰と矛盾して居る材料を、其のまゝ無邪氣に載せた場合さへある。この點が却つて共觀福音書の史料として、信任するに足ることを示す最も有力な證據である。

尤も共觀福音書に現れたイエスの姿を、全く宗教的想像の產物とする人もないではない。現に我が邦にも『基督抹殺論』といふ書を公けにした人すらある。併し斯くも活々とした個性を備へ、鮮かな史的背景を有する人格の姿が、全然宗教的想像の織り出した綾であらうとは、不思議の極といはねばならぬ。否な寧ろ斯かる馬鹿らしい考ば殆んど齒牙にかくるに足らないのである。吾人は斯かる愚論に筆を染める必要を認めない。

第二節　研究の發達

西曆二五一七年ルーテル (Luther) が、ウイッテンベルヒ大學の門前で法皇の破門狀を焚いて、九十五箇條の非難文を掲げ、法權を打破して專ら聖書に歸るべきを宣言してから、急に聖書の研究が廣く行はるゝやうになつた。而してラテン譯では滿足が出來ず、直ちにギリシヤ語の原書に溯つて、其の正本を見むとするものが陸續輩出したので、所々の圖書館に古寫本が發見せられ、其數一千五百有餘の驚くべき多數に達した。同時に是等の寫本相互の比較考證もせられたからして、前人の曾つて夢想だにしなかつた新事實が發見せられ、從つて新約全書 (New Testament) の意義も一變した。

從來福音書は、イエス・クリストの言行を誌したものであるから、之に批評を加ふべきでないといふ意見から、基督傳を編むには只四福音書を照り合はし、順序よく其記事を排列するに過ぎなかつた。然るに斯かる聖書の比較研究は、基督傳編纂の上に新材料を提供して、從來の說を打ち破つた。尤も十數世紀に亘つて、久しく學者の神學說及び敎會の慣習傳說に蔽はれたイエスの人格は、容易に其眞面目を發揮すること

が出來なかつた。然るに十八世紀の終りから十九世紀に亘つて、歴史的研究の聲が盛んとなり、萬般の事物其鋒尖に觸れざるものなき時勢に際會して、イエスは始めて人類史上の一人物と認められ、其傳記も通常の歴史傳記の記述法に從つて誌さるゝやうになつて、基督傳は續々世に現れた。

中にも近世の啓蒙思潮（Enlightenment）の勃興は聖書から昔の尊嚴を奪つた。彼等は萬事を理性の標準によつて判斷した。數千年の歴史を有する人類の歴史には頓着せず、自分等の見解に違ふものは弊履の如く惜しげもなく棄てた。彼等の最も顚いたのは所謂奇跡（Miracle）であつた。自然は動かす可からず、抂ぐ可からざる法則に支配されて居る。然るに奇跡は自然の破毀を意味する、といふ前提から出發して、ライマールス（Reimarus）やパウルス（Paulus）などの學者は、奇跡に對して合理的説明を説いた。然も彼等は猶ほ福音書は徹頭徹尾歴史的事實を語るものといふ迷信を脱し得なかつた。

かかる所へ一八三五年にシトラウス（Strauss）のイエス傳が現れた。彼は福音書が純粋の歴史書でないことを根本的に説明した。奇跡は其の時代の信仰より説明すべきもので、己が理性を標準として牽强附會すべきでないとした。彼れの著作は基督傳の編纂、福音書研究の歴史に確かに一新紀元を開いたものである。之より基督傳の史的研究が一層の興味を學者間に惹起し、ついで無數の傳記を産むだ。シトラウスのは極めて論理的學術的に書かれたものであつたが、それと同じ目的を以て然も通俗的に全く小説的に叙述せられ、基督傳を恰もパノラマのやうに衆人の目に現はしたのは、ルナン（Renan）のイエス傳である。それで彼れの傳記は獨り學者の机上に飾られたのみならず、一般民衆に愛讀せられ、ヨーロッパ到る所に流行して、眞に洛陽の紙價をして高からしめたのであつた。

其後バウル（Baur）及びチュービンゲン學派（Die Tübinger Schule）と稱せらるゝシトラウスの弟子等は、原始基督教の歴史を研究し、福音書を始め總ゆる新約全書中の

書を説明した。彼等の研究の結果は、其後の學術の進歩によつて大部分過去の誤謬となつて了つたが、併し歴史的批評的研究の端緒を開いて、幾多の根本問題を始めて提供した功績は、實に偉大といはねばならぬ。

かくして基督傳研究の歴史は、福音書の解釋と平行して、今日に於ては基督傳の正確なる材料を馬可傳に取ることが、史的研究を重んずるもの丶態度となつて居る。尤もこの馬可傳も全く原始的の記録ではなくて、更に古き二個の原本より來たものであることは分つて居るが、其原本は不幸にして未だ發見せられない。而して最後に今日多くの基督傳記中權威あるものは、ハウスラート (Hausrath) の著書であらう。

基督傳が今日の如く變遷して來たのは、全く科學的歴史的研究の結果であつて、決して宗教的觀念や宗派的反目から出たのではない。固より此種の考から強ひてイエスの神たるを否定せんとしたもの、又其人たるを高調せんとしたものが無いではなかつた。併し科學的研究に忠實であつて其結果の如何を問はず、イエスが一個想像上の人物になるか、將たナザレの一大工に終るか、只事實をして事實を語らしむべしとする學者が、多年相繼いで研究した結果今日の狀態に到達したのである。それでも今なほ宗教上の觀念からして其進路を妨げんとするものは少くない。併し勢ひの赴くところ早晩茲に達せざるを得ないのである。

恁うしてイエスが全然一個の人間となつて了つた時に、基督教徒の信念上にどう影響するか。其尊崇の念は害せられるかといふに決してさうではない。寧ろ益々敬虔の心を增さしむるのである。中世紀以前には、イエスは名は救主といふも實は天上雲遠かな邊に遠ざけられて、吾人日常の生活とは沒交渉であつた。そして唯神學者の議論に弄ばるゝ玩具か、或は冥想界の偶像に過ぎなかつた。それが最近科學的研究の光によつて、全く吾人と同感の人間たることが明瞭になり、始めて偉人崇拜といふ吾人天賦の渴望は、充分の滿足を茲に見出すことになるのである。吾人の人格は彼れの偉大なる人格によつて導かれ、又養成せられるからして、彼れが人間的なればなるほど、

吾人に親愛の熱情を增さしむるのである。

吾人の基督傳は上に述べたやうな歷史的批評の立場から、專ら馬可傳に據つて叙述するものである。そして歷史的事實と想像的傳說との區別は成るべく明らかにせむと力めた。併し傳說に過ぎないからというて、それを全く放棄して記さないではない。否な寧ろ大いに記した。何んとなれば、假令想像的架空の傳說にしても、少くとも夫れが傳說であつたといふことが事實である以上は、其傳說の時世に及ぼした影響とか感化とかをまでも否定は出來ないからである。でイエスの誕生とか復活のやうな感化の大きかつた傳說は敢えて誌すことを躊躇しなかつた。それに一々劃切なる批判を下すことは固より怠らないつもりである。

第二章　ユダヤ

第一節　ユダヤの歷史

吾人は進んでイエスの時代を說くにあたつて、茲にさゝやかな豫備知識を持つ必要がある。

紀元前二〇〇〇年の頃、ヘブライ（Hebrew）人はメソポタミヤの故地を離れて、パレスチナ地方に移住した。彼等は宗敎の民であつた。當時東方諸國には到るところに多神敎（ポリテイズム）（Polytheism）が行はれて居たにも拘らず、獨り彼等は唯一の上帝エホバ（Jehova）を崇拜せる一神敎（モノテイズム）（Monotheism）に固着し、他宗敎と混同せむことを避けた。それがため近隣の人民と宗敎上相容れなかつた。其後饑饉に遇つて紀元前一五五〇年頃エジプトに移り、其王の保護をうけて、二百餘年の間自由に固有の一神敎を奉じて居

つた。然るに次第に異教徒のエジプト人から迫害を受け、又國王の虐待に堪へられなくなつて、遂に紀元前一三二〇年頃モーゼ（Moses）といふ人の指導の下にエジプトを去り、ヒタ人を逐うてパレスチナの故地を恢復した。

爾來彼等は祭政一致の政府を建て、ショフェチム（Shofetim）といふ高僧の統治下にあつて、十二族が國内を分領した。然るに内は十二族の團結が弱く、外からは異教徒の攻撃が度々あるので、遂に紀元前一〇五五年預言者サムエル（Samuel）は、國民の希望を容れて政體を變じ、サウル（Saul）といふものを立てて王とし、國内の統一を計つて自强の策を執つた。それで第二代の王ダビデ（David）の時代には國威が大いに揚つて、イエルサレム（Jerusalem）の新都を創め文武の諸政を整へ、又シリヤを滅してエウフラト河まで國境を擴めた。その子ソロモン（Solomon）に至つては、民財を徴收しフエニキヤ人を使役して、宏壯なる上帝の禮拜堂をイエルサレムに建立し、又貿易を盛んにした。けれども是と同時に、フエニキヤ人の崇尊せるバール（Baal）教

や、エジプト人の信仰せる多神教を國内に弘めさせたり、或は重税を課して專政を斷行したりしたがために、痛く國人の反抗を招いた。それで王の崩御せる年に、北部の十族は其治下を脱して、別にイスラエル（Israel）王國を造つた。又それと同時に南部の二族は、ユダヤ（Judah）國を建て國土が兩分した。時に紀元前九五三年であつた。然も兩國は互に相攻爭したがため、益々國力衰頽して遂に滅亡を招くに至つたのである。

紀元前七二一年に、イスラエル王國はアッシリヤ（Assyria）に滅ぼされ、住民の大部分は捕虜として拉し去られた。而して其處で土着の民と混じて、固有の宗教風俗を失つて全く歴史より消え失せた。又一方のユダヤ王國も同じく五八六年に、バビロン帝國の創業者ネブカドネザル（Nebuchadnezzar）に滅ぼされて、住民はバビロンに移された。然るにユダヤ人はバビロン虜囚（Babylonian Captivity）中も好く其宗教を固持して居た。其後ペルシヤ（Persia）が起つてバビロンを滅ぼすに及んで、五三九年に彼

等は飯國を許された。夫れからイエルサレムを中心として其特殊なる宗教的發展を遂げた。かくして現れたのが即ちユダヤ教(Judaism)である。

併しバビロンの虜囚から飯つて來たユダヤ人は、最早政治上獨立せる國民ではなかつた。彼等の建てたのは國家ではなくて神殿であつた。宗教は國家的生活と分離して全く神殿の祭事となつた。祭事は國民的生活の粹であつた。かうして祭司は次第に勢力を得て貴僧の位置にのぼり、僧俗の區別は益甚しくなつた。世間的位置の高まるにつれて祭司は俗化した。彼等の墮落は紀元前二〇〇年頃其頂點に達した。腐敗したる彼等の黨爭はシリヤ王アンチオコスの干渉を呼んだ。王は直ちにイエルサレムに來て神殿を占領した。その一部分を破壞して祭事を禁じ、エホバの祭壇をギリシヤの神ゼウス(Zeus)に捧げむとした。この暴擧は忽ち國民の反抗心を煽つた。敬虔深い愛國の士は起つて干戈に訴へ、シリヤ人を放逐した。暫らく國家的獨立を保つたユダヤは間もなくハスモン王家(Hasmoneans)のもとにローマ人に併呑せられた。

ユダヤ人は其國土既にローマの屬國たるも、其心は決して隷屬して居なかつた。ローマ帝國の偉大も彼等の眼中には無かつた。彼等はローマ人の壓制甚しきに從つて反抗の精神を愈昂めた。そして遂に彼等の所謂理想の王國が天上から降臨して彼等の間に實現せらるべしと唱へ出した。此聲は大なる反響を四方に生ぜしめた。エジプトの祭司長は、此世界が破滅して了つて新たな世界がまた生ずべしと唱へた。ローマの文豪ヴァージル(Virgil)の如きも、此腐敗せる社會の滅亡を感ずるに至つた。ユダヤ人の小國を以てして、然も斯くの如き大膽なる確心を懷かしめ、甚しきは直ちに兵を擧げてローマの大帝國に叛かしめんとするに至つた。斯かる無謀なる行動に對しては相當な理由がなくてはならぬ。夫れは彼等の宗教であつた。

第二節　ユダヤの宗教

ユダヤ人が宗教的民族であつたことは前に述べた。彼等の民族發展史は實は宗教發

展史であつた。そして其宗教の基礎は律法（おきて）であつた。彼等は律法に於て神の聖なる意志を發見したのである。律法によつて彼等は眞の宗教と僞の宗教とを區別した。又神の撰民なりとの確信を抱いた彼等は、義人を以て標榜し、傲慢な態度で他の異邦人を罪人と呼んで輕蔑した。

律法の中心はユダヤ人の國民的特色その風俗習慣であつた。そは紀元前一〇〇年頃になつて長足の發展を遂げた。その規定は益煩瑣を加へ、日常生活の些細な點にまで立ち入つて一々人の行動を支配するものとなつた。彼等は割禮（サーカムシジョン）(Circumcision) を以て異邦人と區別する著しき特徴とした。同時に異邦人との交際結婚を禁止したり、安息日（サッバッス）(Sabbath) の聖別或は淨と不淨、其他身體や器具の洗滌など百般の事柄に關して一々綿密に規定した。今や律法は神の意志となつた。命令となつた。そして神はたゞ否應なしに盲從を要求する專制君主となつた。宗教は服從となつた。かうしてユダヤ人は神に對して遂に溢るゝ喜悅を感じ得なかつた。神を父と呼ぶことは決して珍しくはなかつたが、其父といふ意識は徹底しなかつた。彼等は神は主であつて人は僕であると一般に考へて居た。神は何事をも勝手氣儘にすることが出來るとした。そして此親しみ難い專制君主に服從することを、彼等は神を愛すると名づけた。神の前には塵芥にも等しきを感じ、其萬能を畏れ其尊嚴に平伏したのである。

かくて律法は法律となつて來た。從つて神學者は同時に法學者であつた。彼等はイエルサレムの高等法院に座して其判決を左右した。此律法はユダヤ人の宗教道德を甚しく偏狹にした。律法に於てのみ神の意思が存する以上は、ユダヤ人であつて初めて神に仕へ得るのである。最も彼等の間には傳道さへ盛んになつて、世界的ならむとする傾向は明に現はれた。併しながら遠心力は遂に求心力に打勝つことが出來なかつた。彼等の傳道も、つまりは異邦人をユダヤ人に變じて、自分等の黨勢と光榮とを增さうといふ黨派根性に過ぎなかつた。神は黨派の首領であつた。

律法が法律となると同時に神の觀念も甚しく法律的色彩を帶びて來た。敬虔深きユ

ダヤ人は、神から罪なしといふ判決を得むと切に望んだ。時の經過と共に神の義は峻嚴となり暗憺となつた。神は冷刻な裁判官であつて、人間はいつかは其前に立たねばならぬとせられた。夫れ故に神から義しい（Justification）といふ判決を得むとは、敬虔深き者の何よりも切に望んだ所であつた。夫れには律法の條項に抵觸してはならぬ。宗教家は唯だ此律法に觸れざらむことにのみ齷齪して、內容よりも形式に拘泥し體裁、見え、僞善に魂を奪はれ段々墮落して行つた。かくて其模範的宗教家が律法に捧げた狂熱も、內部の空虛を蔽ふ襤褸隱しに過ぎなかつた。襤褸隱しだけに彼等は特にそれを見せびらかした。イエスは是等の專門的宗教家に反對して起つたのである。そして彼れの敵は學者及びパリサイ人であつた。

聖書及び傳承に含まれたる千差萬別の規定より成る律法の解釋は、專ら夫れに身を委ぬる學者（スクリーブ）（Scribe）即ち神學者と法律學者とを兼ねた聖書學者を必要として來た。而して斯かる學者でなければ眞に神意を解し得ないといふことになつた。此學者の指導のもとに律法の訓話、解釋に專ら身を委ねたのが即ちパリサイ人（Pharisee）である。彼等は宗教專門家、模範的宗教家であつた。彼等は特別の團體を組織して一般人民とは分離した。自ら義人賢者を以て任じ、一般人民を罪人又は愚民（アムハリーズ）（Amharees）として見下げた。人民が拂ふ尊敬に傲慢と輕侮とを報いた。最も彼等の中にも赤心より神を畏れ、神に仕へて永遠の責任を重じたものは決して少くはなかつたらう。併し彼等はユダヤ教の代表者として長所を打ち消して餘りある、その幾多の弊害の代表者であつた。

ユダヤ教の一般に認めらるゝ特色は、其一神教（モノテイズム）といふ點である。ユダヤ人自らもそを己が長所と考へてギリシャ、ローマの多神教（ポリテイズム）を迷信と批評した。又異邦人間の傳道にもそを最も有力なる推薦狀として用ゐた。最も一神教の思想其ものは必ずしもユダヤ教特有のものではないが、然もそが特有の長所と考へられたのは、彼等の神エホバが、活きた人格的の神であるといふ點にある。エホバは、自由意志で以て民族や個

人の運命を掌裡に握り勝手次第に左右する。而して彼はイスラエルを特にわが愛兒と撰んで將來の光榮を約束したのであつた。彼は世界の創造者であつたのである。かゝる活々した神が特殊の勢あり生命のあつたのは自然である。然るに夫れが漸次實際の力を失つて理論に了らむとする傾を現はして來た。エホバの親しき名は忘れられて、神聖なるものとか主とかいふ遠廻しの抽象的名稱が用ゐらるゝやうになつた。

かく神の觀念が次第に抽象的超越的となつて唯一神の信仰が追々其勢力を失ふにつれて、今まで斥けて來た多神敎の傾向が頭を擡げるやうになつた。例へば天使(エンゼル)(Angel)の信仰の如き夫れである。神があまり高く遠くなつたので、斯かる神の使者を要するに至つたのである。是等の天使は種々に分類され、主なるものは特殊の名稱を得た。神は名を失つて天使は名を得 來た。又神と正反對な惡魔(サタン)(Satan)といふ思想も時と共に勢力を得て來て、恰も神の下に天使の群がある如く、惡魔は己が配下に幾多の惡鬼を率ゐるものと信ぜられた。かうして二元的傾向(デュアリスチック ナンデンシイ)は元來の特徴を打消して行

つた。

第三節　メシヤの觀念

ユダヤ敎の特色であつて、國民的希望と離すべからざる結合を持つて居るものは、メシヤの觀念である。メシヤ(Messiah)即ちギリシヤ語のクリスト(Christ)は王の意味で「膏注がれた者」といふことである。イスラエルの古俗に、王の即位式の時その頭上に膏を注ぐことがあつたので起つた名稱である。最も後には特別の王の名稱としてのみ用ゐらるゝやうになつた。其特別の王とは世の終りに於て、ユダヤ人が待ち焦れた神の國を地上に齎す偉大なる王の謂である。

メシヤが國民の間から起つて叛亂を起し、國民を率ゐてローマ人を驅逐し、イエルサレムを中心として世界を統治するの日はいつか來るであらう。ユダヤ人は斯く考へて居たのである。人は神に親しく近づき平和と喜悅とに充ちた黃金時代を實現する

救主（セービアー）（Saviour）であると信じて居た。そして彼等はローマ人の壓制が加はるに從つて益此觀念を强うした。屈辱の念が昂まるにつれて愈メシヤの現出を熱望した。同時に色々と未來の黄金時代を想像の裡に描いて樂むだ。その黄金國を稱して神の國（Malkuth Javeh）といつた。或は天國といつたり、又はメシヤの國とも名づけた。イエスの「神の國近づけり」といふ福音は、此ユダヤ一般の希望に根據を持つて居たのである。

さて神の國が什ふして出來上がるか、從つてメシヤはいつ來るか。是に關してはユダヤ人中にも一定した思想はなかつた。其の中で重なるものを列擧して見よう。

一、サドカイ（Sadducee）派といふ、一種の敎派がユダヤ人の中にあつた。此敎派は貴族を多く含む溫和黨であつて、寧ろローマの政治に左袒し、ローマ政府と特約して目前の富貴榮達を全うするを以て足れりとした。從つて神の國といふやうな觀念は餘り念頭に置いて居なかつた。

二、パリサイ（Pharisee）派なるものが別にあつた。こは通俗ユダヤ敎とも稱すべきもので、人民一般の信仰を代表した。彼等の多くは平民であつて、政治上からいふと國粹派で、ローマの政治に服することを潔としなかつた。何時かは神の國即ちメシヤの國を建てゝ黄金時代を現出しようと望むだ。自分等が出來る丈け嚴重に戒律を守つたならば、神は其報酬として屹度天國を此地上に下し給はるべしと思つて居た。彼等の想像に依る、理想の國は、已に成つて天上にあるのである。理想の王も彼處に居るのである。そして黄金時代になると忽焉として地上に降臨すべしとした。

三、エッセネ（Essene）派といふ一派は、全くサドカイ派と正反對に富貴を擲つて貧賤に甘んじ、一種の隱君子を以て自任した。彼等は或は野に脫れ或は市に隱れ、一切の福利を捐てゝ一身の淸淨を保たんとした。又パリサイ派の樣に只戒律を守ることに安んぜず、一種高尙な德を積まむため難業苦行を勸めた。彼等は神の國

を精神的に冥想した。そは有形的のものでなくて、人々の心裡に實現すべきものであると考へた。

四、正義派とも名づくべきガリラヤ(Galilee)人ユダ(Judah)の一派は、又別樣に考へて居た。天國はエッセネ派の想像する如き主觀的のものではない。又パリサイ派の思惟する如く忽焉として天上から降るものでもない。況んやサドカイ派の如く現狀に安んじて、己の榮華を貪るが如きは國民の最も恥づべきことである。天國は是非とも建設すべきものである。客觀的存在を有すべき國家である。之を建設するには又に嶇らずしては出來ない。故に吾が黨は又を提げて神の國を地上に建設すべしと息卷いた。そして彼等は屢兵を擧げ、ローマに對して叛旗を飜したが其都度破られた。幾度となく撲滅せられむとしたが、彼等の子孫は相次いで其素志を飜へさず、イエルサレム滅亡の時に至るまで根氣とローマ人に戰を挑むだ。

茲にエッセネ派の主張によつてイエスの時代に一般人民の强き信念となつて居た

終末觀(エスカトロヂー)(Eschatology)を說明する必要がある。それはアポカリプシス(Apokalypsis)(啓示の意)と稱せらるゝ諸書によつて述べられ又弘められたものである。夫れ等は世界の終末に關する神意の祕密を啓示し、神國の出現の遲きを訝かれる、又は國民の非常の厄難に際し神の支配に疑を抱かむとせる同胞を宥め慰め勵まさむを目的とした。其の特質の二三を擧げると、アポカリプシスの著者等は世の終りが目前に迫つたと信じた。又世の終りの出來事を詳細に告げ得ると信じた。彼等は此世の續く間の年月の數や其終りに際して現はるべき種々の徵などを說いた。神意を打算し得ると信じたのである。大體に於て彼等はイスラエルの勝利、異邦人の屈服といふ希望を脫し得なかつた。が同時に世の終りと共に死人が復活し、生けるも死せるも各己が行爲に對して嚴密なる神の裁判を受くべきものと信じた。之からしてメシヤの觀念にも變形を生じた。彼等はメシヤをば天使に圍まれ雲に乘つて現れ、新しき世を齎して來る超自然的實在と考へるやうになつた。

是等の主張に滿足すること能はず、別に一大見識を開いてメシヤ運動の先驅となつたもの、即ちバプテスマのヨハネである。

第三章　ヨハネ

第一節　イエスの先驅

紀元廿八年ローマ總督ピラト（Pilate）治世の時に當り、ユダの荒野と稱せらるゝエリコとイエルサレムとの間に、一人の預言者が現れた。熱烈なる口調で以て宣して曰く、「天國は近づけり悔い改めよ」と。此人こそバプテスマ（洗禮）のヨハネ（John the Baptist）である。

ヨハネは世間の事多く虚僞であつて眞實ならざるに倦むだ。それで幼少の折より父の家を出て、己が心一つを友として語らはむと原野に往つて德を磨いた。その間に彼れの心は、又舊約書中の預言者イザヤ（Isaiah）と親しく契つた。古人の感化と荒野の光景は二つながら他日彼れの敎へたる中に歷然と現れた。ヨハネは人間の僞を離れ

たる處で遂に眞理を見出だし得たのである。彼は身に駱駝の毛衣を着て腰に革の帶を纏つた。岩の崖に群棲せる野蜂の蜜だの、南風に送られて來て谷々に集れる蝗蟲は彼れの常食であつた。ヨハネの異樣なる風采、粗朴なる衣は民衆の大なる注目を惹き起した。罪となやみとに疲れ果て、心ひそかに神のうれしき御代にあこがれた人々には此「野に呼べる人」の聲は惰眠をさます氣つけであつた。

勿論彼れの宣言は決して新奇ではなかつた。彼れが多大の感動を民心に起したは、必ずしもその宣言に因るものではない。同一の宣言はパリサイ派やエッセネ派の已に熟知した所である。たゞヨハネに於て新たなるは、彼れが直ちに實行に着手したことである。イエスが後に完成せるものを、彼れが先きに企てたのである。彼はメシヤ王國の希望を單に喚起するに止らずして、之を建設せむと志したのである。一般民衆は自らアブラハム（Abraham）の裔たるに由つて必ず約束の王國を與へられむと信じ、只空しく之を期待するのみであつたが、彼は之に滿足しなかつた。パリサイの徒も單に消極的に民の墮落を防がむとのみ勞したが、彼は之に滿足しなかつた。又エッセネの徒は、國民の大期待を忘れ、徒らに其小團體の中に一身の清淨を保たむとのみ苦しむだが、彼は決して之に滿足しなかつた。彼は天國がたゞ上天よりの恩賜ではなくて人間勤勞の効果であることを明にした。星宿の間に懸る夢幻的のものではなくて、地上に建設創始せらるべき王國であると說いた。そして其言葉と方形をば世間の常格に適合せしむるに遑あらず、己れを現して驚き合へるユダヤ人の前に立つて、天國は既に來らむとして門口にあることを宣言したのである。之はヨハネが他に超越したる思想であつた。それで親しく彼れの說敎を耳にしたイエスは、彼れを呼んで婦人の生みたる者の中で最も偉大なる者として曰く「洗禮者ヨハネ以前にあつては天國は預言なりき。彼れ出でゝ以來人々奮勵努力以て之を獲んとす。而してよく奮勵努力したるものは之を獲たり」と。

ヨハネが當時の人々に告ぐべきことは、彼等がメシヤの來るを待つ用意のないこと

である。彼等の生活は今や眞實を失ひて罪に蔽はれたれば、出でゝメシヤを迎へんと欲せば、先づ根柢より生涯を一變せなければならぬ。彼はイザヤの言を以ていつた。

「今や斧は樹の根に置かる、凡て實を結ばざる樹は斫られて火中に投せらるべし」と。神の國の契約は彼れの口に上りて美妙なる音樂と響かず、却つて恐しき審判の日を宣するものであつた。「悔い改めよ」とは此嚴格なる預言者の主張したる使命であつた。彼は之を一人若くば一部の人に向つて云つたのではない、總ての人に向つて要請したのである。深く外形の底に徹したる內心の改革を唱へたのである。彼は罪を責めて怨することなかつた。併し人をして敵意を起さしめなかつた。驕れるパリサイ黨に向つても、來るべき神の怒を免るゝことを促した。同時に彼は苟も人の心を迎へむために眞理を曲ぐるやうなことはなかつた。自ら義人なりと恃める聽衆に向つても、彼等を蝮の裔と呼んで怖れなかつた。國王に對しても、悔い改めよと叫び、動かすべからざる神の律法の大權を主張した。

かくて洗禮者ヨハネが、メシヤの王國を建設せむとする事業は、次の三時期に劃することが出來る。

一、荒野に民衆を呼び集めることが其第一着歩であつた。蓋し預言者等は恩惠の時代の來らむとするや、先づ荒野より始るべしと思惟したからである。イザヤの言に「汝荒野に於てエホバの道を準備せよ、沙漠に於て神の街道を直うせよ」とあるによつても分る。でヨハネも、先づ神政の第一條件たる民衆の悔い改めを喚起するに其獅子吼を以てした。世人が歎んで之を聽くの熱心は自ら驚くばかりであつた。悔い改めたイスラエル民は、ユダの荒野の諸處に宿屋を設けてそこに止つた。

二、洗禮をヨルダン（Jordan）河に於て施し以て民衆の罪惡を洗淨することは、引き續ける第二の事業であつた。之は一種のメシヤ王國創建式ともいふべきものである。彼は之を凡ての人々に推し及ぼさうとした。

三、團體を組織して神の約束に適ふ新生涯に入らむとする。是れ人力のよく成し得る最後の事業であつた。ヨハネは強く逞くましき角力者として之を捉へむとしたのであつた。

精神餓ゑて病める如き人心は能くヨハネを認識し得た。全國の人皆出でゝヨハネの許に到り、罪の懺悔をなしたるを見れば、國民を歴したる病患の甚だ重かつたことが分る。中にはメシヤの跫音の近づけるに引かれて來た人も多かつたらう。

第二節　ヨルダンの洗禮

今や前途に光明を認め確く將來を信じたるヨハネは、勇往邁進メシヤ的團體の建設に著手した。イエルサレムの人民は、彼れを愚人よと笑つた。併し已に千難萬礙を覺悟せる彼は寸時も衆愚に耳を措かなかつた。「汝等何を見んとて野に出でしや、風に搖かさるゝ葦なるか」とは、イエスが人々の洗禮者に對する態度に就いて揶揄した言である。彼れの肩にかゝれる粗大な弊衣が王宮の綾羅と何んの關するなきが如く、彼は衆俗の意見の前に其頭を屈するの要を見なかつた。猜疑に對しても反抗に對しても敢て關せざるものゝ如く、只管預言者の誌るしたメシヤ王國の準備に着手せむと、其徒と共にユダヤの荒野を出た。そしてエリコ（Jericho）に近いヨルダン河の邊に下りて、此處で洗禮を施して新たな生涯に入るの盟約をなさしめた。蓋しイザヤが「汝を洗ひ汝を淨うせよ」といへるに據つたのである。預言者等はイスラエルの民族を凡ての罪惡より洗ひ淨むるは、メシヤ王國の第一義なりと思つて居たのである。

浸水は單に改宗の記號たるに止まらない。懺悔したものは洗禮によつて互に一つとなり、共に神に敬事することになつて居た。從つて洗禮は神秘なる神德によつて結合せられたる改宗者の親交をなさしむる所以であつた。同時に夫れは又箇々の罪業汚穢の洗ひ淨めでなくて、已に全く改心したものが新生涯の團體に屬するための盟約の業であつた。夫れ故ヨハネの洗禮は、エッセネの徒が食を共にし沐浴を共にする交りに

似て居る。併し彼等は之によつて兄弟の盟約の繼續を證するけれども、ヨハネは全身一たび水に浸つた後幾度も之を繰り返すは、實に無意味のことゝ考へて居た。箇々の罪業を八釜しゝ云ふのではなくて、人そのものゝ罪惡を云ふのであるから度々洗身する必要はない。唯一回ヨルダンの河水に投ずれば宜いとしたのである。夫れは兎に角この新たなる洗禮の盟約に入つて、己が靈魂の安全を得むと集ひ來るもの民の半ばに達した。學者の徒も初めは彼れを呼んで愚人としたが、軈て一人二人と附いて來て此宗教的新運動の中に加つた。ガリラヤの民も亦この洗禮的新盟約に入つた。ヨハネの名は全民衆の間に喧傳せられた。彼れの悔い改めの說教は雷の如く國民を戰慄せしめたのである。

イエルサレムの民は、陸續と踵を接してヨハネの許に集つて來た。一家又一家、終に全イエルサレムとヨルダン全地方は悉く洗禮をうけむとて集つた。或るものが天國に入るためには何をなすべきかと問うた時ヨハネは答へた。「二つの上衣を持つものは一つも有たざるものに頒て、肉の餘りあるものも亦しかせよ」と。又彼は稅吏に向つて云つた。「定められたる額の外多くを貪り取る勿れ」と。是等の言葉は多くイザヤの精神から來て居る。さて彼れの說教を聽いた民衆は、皆俱に彼れがエホバより遣はされし神の眞人たるべしと信じた。然るに彼はこの考を斥けて曰く。「われはメシヤにあらずしてメシヤの出世を告ぐる聲なるのみ。われ自ら完備せる德を以て自ら任せりと思ふ勿れ。われは來るべきものゝ靴の紐を解くにだも足らざるものなり。彼れその手に箕を携へてその禾場を掃き清め糠は火もて燒き盡すべし」と。

バプテスマのヨハネが、自ら別に一派を樹て得べくして之をしなかつたので、弟子は痛く失望した。若しイエスの昇る勢力に對抗して名分を爭はしめたら、勝を一局部に制することも難きでなかつたらう。然るに彼れが自らメシヤにあらずといひ、單に來るべきメシヤの出世を告ぐる聲であると謙遜したのは什ふいふ譯であるか。是れは問題である。蓋し彼は一面自己の力によつて神の國を建てむとしたが、尙エホバが外

よりして之を扶助して呉れるだらうと心頼みにして居た。然も彼は矢張りユダヤ人であつて、建てむとする國は遂に地上的なるを免れなかつた。彼れにあつては、天國はイエスに於ける如く人の性情に存せずして、エホバによつて建てらるゝ有形的神政國であつた。自分の双肩に王國を擔ふべき力は彼れには到底なかつた。彼れの運動には自己の重力によつて自己を支ふべき創見を缺いた。玆に外部よりの患は壓して來た。彼れの確信が獨創に出でずして古傳的なりし如く、王國建設の方法もユダヤ教の舊路を踏襲した。彼は悔い改めを以て其の方法としたが、夫れは單に天國に入るべき豫備たるに過ぎずして、達し得たる狀態そのものではなかつた。かくてヨハネは天國の出現するまでの間隙を充たすことが、容易の業でないことを知つた。彼は夫れをなすに堪へなかつたのである。夫れで彼は預言者の往事を追懐して、己が唯一個の先驅者一個の雇はれ人たるに過ぎずして、決して創業者にあらざることを自覺し、さてこそエホバが外よりして之を助けむことを待ち望んだのである。

ヨハネは洗禮をば一つの儀禮として如何なる際にでも神が嘉納して呉れるものであると信じて居た。此點に於て彼は全然ユダヤ人たるを免れなかつた。已に一の儀禮の守るべきを立てた以上、他の儀禮の次いで起るは當然である。果せる哉、時の經るに從て彼の弟子等は斷食を以て其悔改の表示とするに至つた。「我等とパリサイの徒は屢斷食するに何故に汝の弟子等は斷食せざるや」とは、彼等がイエスに詰問した所であつた。この點はヨハネがイエスの非難をうけざるを得なかつた所である。夫れでイエスはヨハネの人物を短評して曰く、「婦人の生みしものゝ中最も大なるものなれど、天國にあつては最も小さきものなり」と。

ヨハネは單に曉の傳令使に過ぎなかつた。彼は新しき國を指點した。併し自ら之に入る能はず、又其の案内を詳にすることが出來なかつた。恁くて彼はユダヤを去つて、更にヨルダン河の彼方太守領の地方に其悔改の叫を擧げむとした。然るに彼は圖らずも玆で一生の試驗を受けることになつた。

太守ヘロデ、アンテパス（Herod Antipas）は、イエスが猾忌深き狐と呼んだ小暴君であつた。そして今やヨハネは此太守の城を去る四哩許りの地に來て、新たに獅子吼したのである。民衆は皆彼れの說敎に慟かされて四方より犇々と押し駈けた。太守は斯かる人の民衆に及ぼす影響が、叛亂の種ともならむかと恐れた。革命を未然に防止せむと親らヨハネの屯地に赴いた。然るに太守には斷つ能はざる一の罪緣があつた。夫れは彼が自分の兄弟なるベータスの妻ヘロデヤ（Herodias）と密通し、現在の正妻を離緣したことである。それで此時ヨハネはヘロデヤのことに說き及ぼし直言して曰く「夫れ唯だ一の個條に於てなりとも徹頭徹尾良心の命に從はざるは良心の全體に脊くと同一なり。汝彼の女を娶るは不義なり」と。この言は凜然として太守と寵妾の耳朶を打ち、彼等をして惴々として安き心なからしめたのである。太守は初めより全く良心の聲を打ち消さずして姑く之を包み伏せむとした。彼はヨハネを獄に入れて其聲の城中宴安の樓に聞こえざる處に遠ざけた。けれども隔てられし聲は猶時々罪人の耳に響いて來た。歌舞の音斷ゆる間に良心の聲は何處からともなく襲うて來た。其時は以前よりも一層鋭く耳を刺した。恁うしてヘロデは、時々我にもあらず微暗い獄屋の階段を降つて預言者の坐せる所に行かざるを得なかつた。彼はヨハネをば義人聖人として尊敬し其敎誡に遵ひ、寧ろ彼れを畏れて居たのである。

それでヨハネの禁錮は餘り嚴酷ではなかつた、そは弟子等が自由に出入して外に於ける事業の狀況をヨハネに告げたのでも分る。彼等はヨハネの捕へられし後は、只外部的禁慾を存するのみで徒らにパリサイ黨と斷食を競爭して居た。彼等は王國の新說敎者が現れたことをヨハネに告げた。イエスの行動は實に凄まじいものであつた。その徒は斷食をしなかつた。ヨハネは此風評を聞いて疑惑の念に驅られた。彼は囚獄から二人の弟子をイエスの所へ遣はして、「來るべかりしものは汝なるか、果た他に俟つべきか」と問はしめた。汝はメシヤなるかの意である。イエスの答は恁うであつた。「行きて汝等ヨハネに告げよ。汝等が聞くところ見るところの事を、盲人は見、跛者

は歩み、癩病者は潔められ、聾は聞き、死にし者は甦り、貧しき者には福音傳へられたり、福なり、我れに躓かざる者は」と。さて盲人は見云々はイザヤ書が來らむ神の御代のよろこばしさを語つた言葉である。イエスはあらはには夫れとは云はなかつたが、彼れの答は「われはメシヤなり」というたのと少しの變りもない。さて此問答がヨハネの耳に達したのは事實であらう。然も夫れが洗禮者を滿足せしめたか否かは分らぬ。彼は其年の夏を終るまで禁錮の中にあつた。

夏が終るや忽ちにして彼れの終焉は來た。太守ヘロデはこの偉人の敎によつて時々は善心を起すこともあつたが、毒婦ヘロデヤの憎惡は愈つのり遂には此聲を無きものにせむと決心したのである。夏の或る一日、ヘロデは其即位の紀念祭を行はむと隣國の君主を招き、朝臣を宮中に集めた。その夜酒宴の席上でヘロデヤの娘が舞をまつて非常の喝采を博した。王は悅んで欲するものは領土の半ばなりとも與へんと東洋的誇張を以て約束した。娘は母の敎唆に從つてヨハネの首を賜はれと乞ふた。太守は深く自ら悲しんだ。併し最早如何ともすべきやうなく其請を容した。洗禮者は此夜獄中で斬首せられたのである。凄まじき贈物は煌々たる燭光の下に運ばれた。盆に盛られた首は少女の手から其母に渡された。ヨハネの弟子は之を聞いて集り其屍を取り上げて墓に葬つた。

洗禮者ヨハネ囚はれたりとの警報は僻邑陬里のはてまでも及んで居た。併し初めは此預言者の偉大は必ずや太守の心をも動かし、臆病なるヘロデをして恁く許り民の景仰を受けたる預言者の生命に手をつくることを敢てせしめざるべしとの希望を抱いて居た。然るに毒婦の力は太守の敢てなし得ざることを遂げしめたりとの報は民衆の寢耳を更に驚かした。併しヨハネは殺れたが彼れに對する信仰は之がためには動かされなかつた。夫れのみではない。ヨハネ眞に死したりとは、未だ凡ての民を信ぜしめなかつた。中にはイエスがヨハネの甦りではないかと疑ふ者もあつた位である。

第四章　イエス

第一節　超自然的出生

吾人が基督傳編纂の史料たる四福音書の中で、馬可傳が最古のものとなつて居るといふことは、既に緒論に述べた通りである。而して馬可傳の冒頭に於てイエスは既に堂々たる男子となつて、ヨハネより洗禮を受けたといふ記事があるのみで、その降誕やその少年時代のことは毫も記載されて居ない。然るに馬太傳だの路加傳になると不思議な超自然的な降誕の記事を掲げて居る。其の何れの記事がより信ずべきであるか。之は誰にでも直ぐ起る問題である。吾人は先づ何ものよりも之を解決せねばならぬ。

（イ）降誕の傳說

順序として所謂イエスの超自然的降誕の傳說なるものを紹介しよう。

僻村に生長して其既往の歷史は殆んど知るに由なき、少女マリヤ（Mary）の靜なる生活の調べは端なくも破られた。天使ガブリエル（Gabriel）降り來つて少女に告げて曰く「慶たし惠まるゝ者よ、主汝と偕に在す、汝は女の中にて福なる者なり」と。マリヤは天使の言葉を解するに苦むだ。天使は重ねて彼女が昔より約束ありしメシヤを生むべしとの消息を傳へた。初めて之を聽いた少女の心は什んなであつたらう。畏れと喜びと羞と驚は交々潮のやうに柔かき胸一つに往來したことであらう。

彼の女は之より先きヨセフ（Joseph）なるものと婚約したる身であつて、此時新しき生活に移るべき岸に立つて居た。然るに今や彼の女が聖靈に感じて孕むに及び、恥づべき罪の疑を身に受けたのである。但し夫ヨセフは情を知れるもので之を辱かしむることを欲せず、穩密に離緣せむと考へた。かくて此事を思念して居る時に、主の使者が彼れの夢に現はれて云つた。「ダビデの裔ヨセフよ。汝の妻マリヤを娶ることを恐るゝ勿れ。その孕めるところの者は聖靈（Holy Spirit）によるなり。彼れ子を生まむ

その名をイエスと名づくべし。蓋その民を罪より救はむとすればなり。凡て此事は預言者によりて主の云ひ玉ひし言に、處女孕みて子を生まむ、その名をインマヌエル(Immanuel)と稱ふべし、とあるに應せむがためなり。その名を解けば神われらと偕に在すとの義なり」と。ヨセフ夢から醒めて主の使の命せし言に從ひ、その妻を娶つたけれども子の生るゝまで決して牀を偕にしなかつた。

さてヨセフとマリヤとは、ローマ皇帝アウグスツス(Augustus)が天下に布ける勅令に遵つて、氏名を原籍に錄せられむためナザレ(Nazareth)よりベトレヘム(Bethlehem)さして出立した。百哩あまりの旅程をすぎてベトレヘムに着したが、折りしも旅亭に客が多くて入るべき處がなかつた。止むなく僅に庭の一隅の牛馬を繫ぐ處へ、一夜を明さむと洞窟に入つた。頃は嚴冬の夜半のことゝて、寒風肌を劈きて堪へ得べくもなかつた。その時マリヤは頻りに胎内が動くので、偖こそと洞内の奥なる片隅の靜なる所に默然として敬畏の心を神に捧ぐる折しも、更に苦痛を覺えず候ち安らかに

一子を產むだ。即ち之を布に包むで馬槽の中に臥させた。外には世間より打ち寄する波の音のみ騷がしく、救世主が此の夕べ大工の妻より生れ出でしとは夫婦の外に知るものはなかつた。此の夜、羊をベトレヘムの野外に護れる一群の牧夫があつた。天使の告げによつて夫れと知り、馬槽の籃搖の裡に嬰兒を音づれた。又東國の博士は、彼れを拜せむがために星の光の案内にて沙漠を越えて遙々と訪ねて來た。」

是等の傳說は數限りがない。併し其傳說を網羅することは今の場合吾人の目的でない。吾人は茲に筆を擱くべきである。

（ロ）降誕の說明　イエスの不可思議なる降誕の記事が、單に自然律に背くからといふだけで直ちに否定し去るは、學問的批評的態度に於てなほ缺くる所がある。吾人は斯かる一般の議論を俟たず、四福音書の相互の比較及び其の記事の內在的批評に據つて、同じ結論に達し得るのである。

基督教に屬する書類のうち最も古きは、パウロ(Paul)の書翰(エピツスル)(Epistle)である。

然るに其の何處にもパウロは超自然的出生を語つて居ない。彼は單にイエスは肉體によればダビデの子といひ、又は女より生るといつて居るのみである。此「女より生る」といふ語は父なしの意を含まぬのみならず、彼れが他の人間と齊しく人間なるを特に取り出て說明したもので、不思義なる降誕の考とはむしろ矛盾する。

福音書の中で最も古い馬可傳も、亦前に述べたやうに此の如き事實には一言も說き及んで居ない。否むしろ超自然的出生と全然相容れない次の樣な記事がある。「イエス此處を去りて故鄕に到りしに其弟子等も彼れに從ひぬ。安息日なりければ食堂にて敎を始む。之を聽ける衆人奇み云ひけるは、如何なれば此人に斯くの如きとあるか。彼れに授けられたる此の智慧は如何なる智慧ぞや。又此の如き不思議なる事を其手より行ふか。彼はマリヤの子にしてヤコブ、ヨセ、ユダとシモンの兄弟なる木匠にあらずや。其姉妹も此處に我儕と共に在るにあらずや」と。イエスは預言者が其故鄕、その親戚、その家にては何等の價値も認められないことを嘆じたのである。若しイエスの父母や兄弟姉妹にして彼れの不思議なる降誕を知つて居たならば、彼れを遇する決して斯くの如く冷淡なることはなかつたであらう。

曾に是れのみでない。馬可傳の他の記事に、イエスの近親が彼れを狂人と考へたといふ事實が誌るされてある。若しイエスの誕生に不思議があつたならば、母も同胞も斯く輕卒に彼れを取扱ふことはなかつたらう。之によつて見ると、馬可傳に不思議なる降誕史の附いて居ないのは當然のことで、全篇を通じて未だイエスの不思議な人格なることが現はさうとしてない。而も馬太や路加になると「彼れ狂氣せり」といふことを省いて用ゐなかつたのも面白い。

又約翰傳になると、積極的に不思議な降誕說に反抗する態度が大いに現れて居る。即ち曰く、「彼れの父母は我等の識るところならずや。彼れはヨセフの子イエスにあらずや。然るに何ぞ我れは天より降りしと云ふや」と。

更に馬可傳にはないけれども、馬太傳にも路加傳にも出て居るイエスの系圖を見る

と面白い。而福音書の記事は全く自家撞着に陷つて居る。其の冒頭には「アブラハムの裔なるダビデの裔イエス、クリストの系圖」と題してある。然らばヨセフはイエスの父なりと書いてあるかといふにさうではない。ヨセフに至り一轉して「ヤコブはマリヤの夫ヨセフを生めり。此マリヤよりクリストと稱ふるイエス生れ給ひき」となつて居る。

斯かる系圖が果して何の用をなすであらうか。イエスはアブラハムの裔なるヨセフより出でたる者なることを證明してこそ、此系圖を擧げる必要がある。然らばヨセフはイエスの父であらうか。否系圖には「ヨセフがイエスを生めり」とは書いてない。唯だヨセフはマリヤの夫にして此の「マリヤよりイエスが生れた」と書いてある。勿論若しヨセフが眞にイエスの父であつてマリヤはその母なりとせば、イエスは不思議な降誕をしたものでないことになる。けれども若しダビデの正當の裔たるヨセフにしてイエスの父でないとせば、ヨセフが何程ダビデ家の正統であるにしろイエスに於て何の關係もない。從つて長々しい系圖を擧げる必要もないのである。イエスは實に此のダビデ家の血統とは何んの關係もないマリヤの生む所となつて居るのである。此マリヤは實に突然こゝに出て來て居る。若し福音記者にしてイエスがダビデ系の出なることを證明せむとするものならば、宜しくヨセフの系圖を出さず、マリヤがダビデ系の者であることでも證明すべきであつた。イエスをヨセフの眞の子となす古い傳說のあつたことは、此の自家撞着で明かに證明されるのである。

之によつて考へると超自然的出生は勿論歷史的事實ではない。比較的新しく發生した傳說で、然も古き傳說に於て保存せられた正確なる事實と氷炭相容れない。又天使がマリヤ或はヨセフに現はれたことも、唯だマリヤの姙孕を告ぐるためのものであつたのが、後に處女にして孕むことを告げたやうに書き直されたのである。その宗教的想像の產物なるは疑を容るべき餘地がない。

第二節　イエスの幼時

イエスが三十歳を越えて公けの活動を初むるに至つたまでの經歷に就いては、吾人は確實なことを知らない。勿論彼れの幼年時代に於ける傳說は無いではない。左に少しく書いて見よう。

太守ヘロデは年老いて病魔と悔恨に責めらるゝ折しも、イエスの生れたのを聞いて東國の博士に其の場所を訊ねんと待つた。然るに博士は夢の告げによつて太守に謁見せずに歸國した。了つた。それでヘロデは怒つて兵士を遣はしベトレヘムの中に居る嬰兒をば慶殺せしめた。但しイエスは其時居なかつた。夫れより以前に彼れの父母は神の命によつてエジプトに遁れて居たのである。イエスは危險の去るまで其の地に留つた。やがてナザレ村に歸つて唯だ賤しき家に大工夫婦の子として生長した。一家內には弟や妹も居た。恁うしてのどかな愛の空氣に包まれて神の訓育を受けたのである。

イエスが十二歳の時であつた。彼れの兩親はイエルサレムの神殿に參詣して小羊の犧牲を献せむと都に上つた。ユダヤの國風では、十二歳になると一生の新時期に達したといふので聖書の試驗を受け、之より後は成人として律法を遵守すべきものとなつて居た。さて親子三人は旅路に上つた、そして犧牲の小羊を殺さむがため、イエスを携へて神殿に參り行事すべて果てた後歸路に就いた。然るに彼等は途中でイエスの俱に居ないのに氣がついた。

此時イエスは再びイエルサレムの神殿に昇り、學者の多く集まれる處に入つて居たのである。彼は僅か七日の滯在では滿足が出來なかつた。ナザレで過ごす千日はこの聖都の一日にも及ばない。彼れの心は知識の愛に引かされて再び神殿に歸つて來た。愛に大なる思想の動搖に觸るゝ喜びは禁じ難かつた。蕾の如く膨らみし思は花の如くに開いたのである。さて父母はイエスが居ないので先づ近親知人の間を探し、やつと三日目に見出した。唯見る。其顏純潔にして熱心現れたる一少年は、堂々たる老學者

の間にありて聖書の奥義を質して居る。然も學者等は問はるゝ中に端なく新しき思想に邂逅し、新しき光線を受くる思ひして却つて一少年に敎へられたのであつた。白髮の學者等は少年の理解力と其應對とに驚いて、雷の耳に聲ぐが如く感じたのであつた。

イエスは今しも兩親の入り來るを見て其側に進み寄つた。此時先づ言葉を發したのはヨセフではなくて、マリヤなりしことは注意すべきである。イエスはヨセフに屬するよりはマリヤに屬して居たからである。「子よ、何んぞ我等に斯くなしたるや。汝の父と我と憂ひて汝を尋ねたり」と。マリヤに對してイエスは答へた。「何故に我を尋ぬるか。我は我が父の家に在るべきことを知らざるか」と。此の言葉の中には聊かも後悔の狀なく、又父母の心配を察する同情も無い。却つて父母が我が居る處を知るべくして知らざりしを、穏かに誡むるの意がある。又ヨセフは父にあらずして、神その父なることを知らしむる如くであつた。

其後イエスはナザレ村に歸つて、以前と同じやうに父母に孝順であつた。家は人に賤まるゝ程の貧窮に沈まざりしも、さりとて必要以上に身を飾るの餘裕はなく、又後日のための貯へもなかつた。彼は父を助けて數年の間、大工の仕事場で忍んで勞苦した。

以上述べた所のものはイエスが公けの生涯に入るまでの傳說の梗概である。夫れを全然信ずることの危險なるは今更ら繰り返す必要もあるまい。殊にイエスが十二歲にして、已にイエルサレムの學者を驚かすばかり律法の知識を具へて居たといふが如きむしろユダヤの歷史記述法の傳奇的筆法であつて、後人の想像を用ゐて描き出したものと見るが自然に近い。たゞ彼れが世に出づる前ナザレに在つて、大工の職に從事して居たことは事實らしい。

彼れが慥かに勞作者の家より出たといふことは、其說話若くば比喩中の文字によつて確めることが出來る。其用語は何れの處に於ても一般勞作者の生活に關し、其知識の精確なること到底勞作者以外のものゝ窺ひ知り得べき所でない。彼は又麵麭屋、植

木屋、建築師の事情にも通じ、穀物商が其穀物を量るに壓しつけ、ゆすり入れなどして量目を利することの如き、上流社會の人々がえも知らぬことにも精通して居た。其他凡百の事柄その比喩の中に織り込まれ、尙自ら執りし職業上のことも幾度となく其言葉の中に含まれて居る。例せば木片と梁木の譬は大工の仕事場より取つたものであらう。其他馬可傳の記事によるも、彼が大工の息子であることは確である。夫れから福音書に母と兄弟とのみ現はれて居るより察するに、彼れの父は早く世を去つたらしい。兎に角吾人が福音書によつて歴史的事實として知り得るは、唯イエスの短き公生涯のみである。

最後に彼れが古のイスラエルの明君ダビデの後裔といふことは、事實よりは寧ろメシヤはダビデの家より出づべしといふ信仰の産物と見るべきである。彼れがベトレヘムに生れたといふことも、メシヤはダビデの生地ベトレヘムより出でむといふ豫言より、宗教的想像の産み出したもので、事實でないことは明かである。

第三節　受洗と試惑

吾人はイエスが單に田舍大工の息子であつて、決して由緒ある門閥の出身でない、況んや聖靈（ホーリースピリット）によつて孕まれしものでは勿論ないといふことを說明した。然らば斯かる賤しき一勞働者が、如何にしてあれだけの大業を成し遂げたか。正當なる判斷と最もらしい推理によつて、吾人は暫く彼れが神國の宣傳に至るまでの動機を想像して見たい。

「イエスは學者ではなかつた。勿論學問を爲し得る境遇でもなかつた。又深い思想を抱いた哲學者でもなければ、非凡な識見家でもなかつた。更に新しい宗教を立てむとして現れて出た者でもなく、又己れ一個に組織的宗教を有つて出た者でもなかつた。唯彼は人情に厚かつた。そこで當時の弱肉强食の有樣、殊に貧乏人や癩病人などの慘狀を目擊して不愍に感じ、何うにかして之を救濟したいものであると日夜頭を惱まし

たことであらう。更に之を押し擴めて、當時其祖國の滅亡して、ローマ兵や收稅吏などの跋扈する樣を見ては、慷慨悲憤に耐へなかつたのであらう。

於此、如何にせば此國をダビデやソロモン時代のやうに立派な黃金時代を恢復することが出來るか。之は始終彼れの心を痛ましめて居た問題であつたらう。併し斯かる恢復の道は迚も人力の及ぶ所でない。イスラエルの歷史を調べて見ると、人の力でなく神の力で出來て居ることが多い。詰り神に依らねばならぬと考へたが、偖て神の力を賴むとすると、先づ此方が神の御心に叶ふものとなつて居らねばならぬ。然るに當時の宗敎界の有樣を見ると、パリサイ派とか學者とかの指導者は、形式に拘泥し傲慢にして不德であるから、到底神の力を受くるに足らない。されば先づ此宗敎界を刷新せねばならぬ。我國民をして、先づ神の御心に叶ふものたらしめねばならぬ。若し我國民にして悔い改めて神の御心に叶ふものとならむか、神の力によつてローマの羈絆を脫して獨立國となり、往時の隆盛を見ること易々たるべく、即ち神の國を建設し得るならんと確信したのである。

思ふにイエスは、之がために日夜神に祈つて居たであらう。そして何んとなく神が我れを用ゐて此大事業を爲さしめ王ふよと感じたであらう。勿論イエスは大哲學者でも大見識家でもない。併し彼れ程の人物であるから、尋常一樣の彙儔ではなかつたらうが、然も彼れの賴む所は全く神の力であつた。それから彼は所謂メシヤの傳說を聞いて居たから、或はメシヤが出て來て此大事業を成すであらうか。さすれば我はその許に馳せ加はらう。が併し若しも神が我れに力を賜はゞ、神に於ては成し能はぬことはないからして、我れをメシヤになさせ給ふことは又易々たるべしと考へたらう。そこで彼は祈をして時の來るのを待つて居た。

斯くて時まさに熟せんとする時、ヨルダンの野にバプテスマのヨハネが現れた。彼はイエスよりも前きに「神の國は近づけり、悔い改めよ」と叫び始めた。イエスは之を聞いて喜んだ。いづれ我が黨の士か、或はメシヤなるべしと。遙々出掛けて行つて

彼れより洗禮を受けて其弟子になつた。彼が水からあがつた時、天が開かれ神の靈鴿の姿にて降りて來るのを見た。「汝は我が愛子、我が悦ぶ所の者なり」と呼ぶ天の聲を聞いた。既に心ひそかに熟した天職の自覺は、此まぼろしを介して一時に爆發したのである。

此の新時期を劃した經驗の後、イエスは惡魔（サタン）の試惑を受けた。吾人は茲に福音書の傳ふる記事を我慢して讀まねばならぬ。

イエスは洗禮を受けた後、聖靈の導を蒙りて沙漠に適き、四十晝夜一粒の米麥をも食はず、一滴の水をも飲まずして嚴敷き斷食を守つた。又默想祈禱を凝して日夜に身を責め、饑渴を覺へ、以て傳道の豫備をした。彼れが四十日の斷食に太く飢ゑたるを見て、惡魔は三個の誘惑を試みた。

一、「汝若し神の子ならば此石に命じて麵麭とならしめよ」。イエスが今迄斷食の苦みに堪へ得たのは、敢て神性より發する勢力によつて自ら支へたのではない。全く中心の歡喜が殷であつて、身を忘れ得たからである。今や此情が退くと共に、飢餓の苦痛を覺えて來て裂かるゝばかりに感じた。惡魔は之に乘じて誘惑を始めたのである。併しイエスは直ちに答へた。「人は麵麭のみにて生きず、但神の口より出づる凡ての言葉に由る」と。

二、惡魔は、次にイエスを聖き都に導き神殿の頂きに立たせて「汝若し神の子たらば己が身を下に投げよ」といつて、偖て早くもイエスが聖書を引用したるを眞似るものゝ如く「そは汝のために神その使者等に命じて汝を護らせん、汝の足の石に觸れざるやう彼等手にて支ふべしと誌るされたり」といつた。聖書の原文には「凡て汝が歩む道にて汝を護らすべし」とあるに強ひて此句を引いて試惑したのである。そこでイエスは「主なる汝の神を試むべからずと誌るされたり」即ち汝は猥りに神の友情を試驗するなと答へた。

三、最後の誘惑は最も險惡なものであつた　今やイエスは惡魔と倶に高山の頂上

に立つた。惡魔は光明の天使にも似たる裝をしてイエスの傍に立ち、下界の榮華燦然たるを指さして誘惑した。「此等のものは皆我が權力に委ねられたれば、汝若し我れを拜せば汝に之を治むることを許さむ。其時こそ汝は心のまゝに盡く人の傷を癒やし、其涙を拭ひ、其苦惱を去り、總て我が荒し零落させしものを恢復するを得む。然も一瞬にして此權を執ることゝならん」と。イエスは輙ち猛然たる勢を以て之を退けた。「サタンよ、我が後ろに退け」と。誘惑は玆に畢つた。

斯かる試惑の記事が想像的裝飾のあるはいふまでもない。併し夫れにも拘はらず、吾〻はそが中心に於ては事實を傳へたものと見るべきである。イエスは人里遠き野原に行つて、獨り彼れにかへり、有り難き神の使命について靜思默想し、凡ての懸念凡ての誘惑と戰つて、終に見事勝利を得たのである。イスラエルの待ち焦れた救主メシヤは我れぞとの自信は、最早動かす可からざるものとなつた。

第四節　傳導と使徒

馬太及び馬可の二福音書は、「イエスが初めてガリラヤの會堂に其教を說いたのは、洗禮者ヨハネ幽囚の時、即ち紀元三四年の春であると記して居る。

さてもイエスは故鄕に歸つて間もなく立ち上つた。彼は洗禮者の死を哀悼する聲を到る處に聞いた。眼を擧げて牧者なきイスラエル國民の現狀を見た。彼れの牧者的衷情は油然として湧き立つた。彼は直ちに活動の舞臺に現れたのである。

イエスは神國の宣傳を初めんとせるに當つて、彼が活動に不便なる故鄕ナザレを去つてカペルナウム（Capernaum）に赴いた。彼れが此邑を以て第一着手の場所と選定したのは故なきにあらず。蓋しカペルナウムは二王領の境界に位し、諸國民の軍用路に沿ひ、ガリラヤ湖に濱して、多くの村落の中央に在つたからである。

カペルナウムに於ける彼の活動は、福音書殊に馬可傳に目に見る如く鮮かに寫され

て居る、直弟子の實歴談より出た明かな證據である。彼れがガリラヤの公衆に神の國を宣傳し、又其會堂に入つて彼等に道を說きしことは確である。尙彼れの說話が多く會堂に於て述べられしものなることは、其形式と內容とによつて察することが出來る。

併しながらイエスは人を選ばなかつた。耳を藉すものには誰にでも喜んで神の國のうれしき音づれを傳へた。殊に專門的宗敎家が、席を同じうするだに汚れと考へたイスラエルの家の迷へる羊、即ち稅吏や罪人や貧しき者や饑ゑたるものは、彼れ自ら悅んで尋ね求めた。彼は又時や處を選ばなかつた。安息日にても平日にても、會堂にても、私宅にても、山上にても、湖畔にても、折りだにあらば口を開いた。彼れの說敎は深大の印象を與へた。學者や專門宗敎家のと異つて如何にも猛烈と聽衆は感じた。彼れが惡人の群に交つて道を說いたことは物議を惹起し、パリサイの徒から非難せられた。併しイエスは此擯斥に答へて「健全なる人は醫師を要せず、病める人こそ醫師の必要あれ、惡人なればこそ敎誨の必要あれ」と語つた。時には又當時の學者と堂々

論議したることあれど、多くは平民の友を以て自ら任じ、常に群衆を圍繞せしめ諄々として道を說いた。婦人は勿論子供を見ても之を愛撫しつゝ「嬰兒の如くならざれば天國に入る能はず」とて、門弟の之を遮るを制止したこともあつた。

さてイエスの弟子の中には、曾て洗禮者ヨハネに仕へたものもあつたらう。彼等は內に道德的熱情を蓄へ、世間一般の宗敎に滿足せず、更に他に需むる所あり、ヨハネの豫備的傳道を以て足れりとせず、今やイエスの現はるゝを見るに及んで心を傾けて歸服したのである。而して彼等が見證者となり傳敎者となりて遺憾なく任務を盡し得んためには、通常の弟子の中より撰拔せる一隊を造る必要があつた。でイエスは彼等の中より特に十二人を撰んだ。後に十二使徒(アポストル)(Apostle)と呼ばれたのは即是である。十二の數はイスラエルの十二族に因んだのである。此使徒撰任はイエスの死する一年前であつたらう。但し十二人を使徒と名づけたといふは後世の附會說らしい。夫れから十二使徒の名は福音書の記事に一致しないのもある。シモン・ペテロ(Simon Peter)

アンデレ（Andrew）ヤコブ（James）ヨハネ（John）ピリポ（Philip）バルトロマイ（Bartholomew）トマス（Thomas）マタイ（Mathew）アルパイの子ヤコブ（James the son of Alphaeus）シモン（Simon）イスカリオテのユダ（Judah Iscariot）は一致して居る。然るに他の一名は馬太にはレッバイ（Lebbeus）馬可にはタッダイ（Thaddaeus）路加にはヤコブの子ユダ（Judah）となつて居る。

十二使徒の中で事蹟の傳はるものは甚だ少い。彼等は孰れも貧しき門地の人であつた。

その最も前きに召に應じたるはアンデレとヨハネであつて、次いでペテロと三人がイエスに謁したのはヤコブより前であつた。最も使命を受けたのは四人等しく同時であつたらしい。夫れを福音書に就いて見ると。イエスが沙漠よりヨルダンの邊りに來た時、ヨハネは衆人に「是れ即ち神の羔なり」といつた。アンデレは此言を聞いて信仰の心を起し、共に携へてイエスの許に到り一晝夜續いて教を聽いた。そして家に歸つて弟のシモンに恁くと告げたのでシモンも逢つて見たくなつて、兄アンデレの紹介によつてイエスに謁見した。然るにイエスは之を見るや、異日教會の司教たるべきことを洞察して告げた。「汝はベトサイダ鄉バルヨナの子シモンなり。汝等は漁獵なり宜しく我れに隨從せよ。汝等をして人を漁らす者となさん。汝今より稱して其名をセフアスと呼ぶべし」と。蓋しセフアスはラテン語のペテロであつて、巖石といふ意味である。かくて彼等は弟子入りをした。翌日彼等がイエスに隨つてガリラヤに行く途中でピリポも加つた。已上の記事の眞僞は兎に角、彼等の弟子入りがイエスの活動の絕對的發端である如く思ふは誤りである。未だ何等の說教をも聞かず感化をも受けずして彼等が職業までも擲つて殆んど初對面の人に從つたとはあまりに奇怪である。次に傳へられたる使徒の傑出せる二三人を紹介しよう。

ヨハネはイエスが特に愛した者で、弟子の中にて最も能くイエスの精神目的を了解して居た。彼は火の如く熱烈で氣慨があつた。然も其底には大なる柔い愛情を包んで

居た。即ち「愛の使徒」であつて又「雷の子」なる兩面の性質を不思議に和合して居た。

ペテロは急激敢爲であつて進取の氣に富み、感情温であつて圓滿なる常識を備へて居た。イエスが初對面に其眞價を認めて巖の人と名づけた如き氣質は、彼れの一生を通じて活躍して居る。彼れの想像は直ちに結果に馳せて中間の行程を算することをせず、己の力を揣ること多きに過ぎた。後に「人は皆クリストを棄つるとも我は死するまで棄てじ」と誓つたにも拘らず、瑣細なる事に壓倒せられて「我れクリストを知らず」と公言した。一度挫折すると臆病風は彼れを吹き飛ばして、二度三度までも同じ虚言を吐かしめた。

トマスは後にクリストの復活せしことを聞いても、自ら實見するまでは頑として信じなかつた。彼は冷然として疑ふかと見れば、又熱烈なる愛情を現はすこともある。その氣質は沈鬱で、恐怖と懐疑とは愛を動かすには至らなかつた。併し信仰を動かさんとすることないではなかつた。

此外の弟子の事蹟は多く判然として居ない。要するに彼等はイエスと寢食出入を偕にし、日夕見聞する所によつて訓練せられ、直接間接の薫陶を受けた。イエスは生涯の大部分を割いて弟子の敎育のために力を注ぎ、其敎訓は多く之を弟子に語り、弟子をして之を宣傳せしめむとした。彼は忍耐して弟子の無智、偏見、迷信等と戰つた。彼等の程度に應じて懇ろに眞理を啓發し、彼等の解するのを待つた。最も困難を感じたのは弟子がメシヤ的王國の意義を肉身的に考へて居る謬見を解くことであつた。彼等の多くは粗野な漁夫の輩で、才智なく、勢力なく、富もなかつた。然もイエスは彼等を用ゐて不朽の業を營むの材とした。彼は弟子等を顧みて、殘りなく其短所を詳らかにしながら從容として云つた。「小さき群よ。怖るゝ勿れ。汝の父は喜んで國を汝等に委ね給はん」と。

第五章　福音

第一節　神の國宣傳

「神の國は近づけり、悔い改めよ」とは、バプテスマのヨハネが野に叫んだ聲であつた。イエスも亦此簡單なる神國の宣傳を以て、彼れの活動を開始した。然らば神の國とは何であるか。

イエスの神の國の觀念は、ユダヤ人一般の信仰に其土臺を持つて居た。夫れに彼れに先だつて、ヨハネが同じ宣言を傳へて人を動かしたによつても分る。苦し自己獨特の觀念を擴めむとし、又は宗教の改革者たらむとする意思がイエスにあつたなら、彼は屹度己れの說く神の國の意義を特に說明したであらう。然るに彼はかかる說明を試みたことは決してなかつた。パリサイ人と激烈な論評をした場合にも、彼は彼等が神の國の觀念を誤つたとは攻擊しなかつた。神の國とさへいへば、聽者が直ちに彼れの

意を解するものと彼は豫想して居たのである。此の點に於て彼はユダヤ人たるを失はなかつた。彼等が待ちあこがれた神の國が今近づいたといふのが、彼れの傳へたうれしきおとづれ、即ち福音（Gospel）であつた。

會堂の說敎及び公衆に對する演說に於てイエスが宣べた神の國は、民衆の耳には極めて聞き慣れた所であつた。唯其宣言の大なる反響を與へ、彼れが人氣を得たのは譬喩の巧なることであつた。彼は平易なる說敎をして好く國民にその意味を了解せしめ又理窟でなく卑近なる例を用ゐ、眞に猛烈なる誠心を以て國民に說いた。それで今まで他の宗敎の死せるが如き形式的の說敎をのみ聽いて居た民衆は、今更の如く驚いてイエスの許に馳せ集つたのである。以前から預言者等が說いて居た大なる審判の日は近きにありとの預言は、イエスに於てもヨハネに於ても變らなかつた。又一般ユダヤ人と同じやうに、イエスの考へた神の國は地上のもの有形的のものであつた。

併しながらユダヤ人の神の國の觀念は、イエスの精神を通過する際に醇化せられた。

彼は神の國の出現が、異邦人の滅亡を意味する一般の希望にはたづさはらなかつた。「ユダヤ人は一般に特別な地位を諸國民の間に占め、神の撰民を以て自任して居た。パリサイの徒は民の罪を罰し、ローマ人に克ち、貴族政治に對して烈しき反抗運動を起し、以て神國を實現せんとした。即ち彼等は神の王國を建てんには、第一にマカビーの獨立戰爭の如き革命運動を要し、之に次いで神の奇跡の天より來るを要すと考へた。然るにイエスは神國を建つるは國家を建つると異る。「神の國は見よ此處にあり、見よ彼處にありといふべきものにあらず、爾等の中にあり」と訂正した。彼は政治と宗教とを明に區別した。彼が決戰せむためイエルサレムに上つた態度を見れば、ローマ人が彼れの眼中になかつたは明瞭である。メシヤはダビデの王家より出づべしとの信仰さへ彼は否定した。彼れの數多き教訓は、ユダヤ人たる資格に關するよりは、寧ろ人間としての責任に關するものであつた。彼は政治よりも宗教を、ユダヤ人よりも人間を、イスラエルよりも神をより多く重んじた。元より彼れとても決して己が同胞の歎きに耳を藉さぬものではなかつた。弟子等を傳道に派遣する時にも、特に「異邦の途に往くなかれ、サマリヤ(Samaria)人の村に入るなかれ、唯イスラエルの家の迷へる羊に往け」と教へた位である。然るにイスラエルが頑迷固陋で、彼れの福音を斥くるを經驗しては、イエスの心眼は遙かに「多くの人々東より西より來りてアブラハム・イザク・ヤコブと偕に天國に坐し、國の子どもは外の暗に逐ひ出だされむ」時を望み見た。彼れの精神はユダヤ人固有の偏狹なる國民的精神を全く超越した。

イエスが神の國を地上的有形的に考へたことは既に述べた通りであるが、吾人は夫れ故彼れの福音の中心をなしたのでは[illegible]ことを忘れてはならぬ。仔細に檢べて行くと、其國は見えざる精神的のものであつた。彼れが今や天の神樹が其根を下界に下ろしたやうに神の國を考へたのは、其神國の意義が主として人間の靈的性情にありとしたからである。夫れ故吾人が彼れの新しき教を聞いて忽ち感ずるは、夫れが神の國に對して全く新たな門戸を開いたことである。ヨハネは之を見出し得なかつた。パリサ

イの徒に至つては之を人々の前に閉ぢた。勿論ヨハネは神の國がガリラヤ人のいつたやうに干戈に訴へて來るべきものではなくて、奮勵によつて獲べきものなるを說いた。併し之を獲るには禁慾の所業と神を悅ばすべき儀禮とに由らんとした。從つて單に消極的方法に由つて人々の淨潔を恢復せんとした結果、次第にユダヤ敎の舊路に墜ちて行つた。凡て先人よりもより多く祈禱し、更らに多く懺悔する。是れパリサイ・エッセネの徒及びヨハネ等が相次いで歩むだ行路であつた。彼等が神國の組織如何に關して神經過敏になつて居た間に、イエスは何よりも先づ思を神に馳せた。彼れにあつては神の國は神の支配である。神の本質、神の生命の洽く凡てに行き亘る新しき世であつた。神のあはれみを得ること、神を見ること、神の子と稱せらるゝこと、是れ即ち神の國である。有形的の觀念は勿論單なる譬喩ではない。併し、又眞髓ではなかつた。

ユダヤ人には神の國は全く將來のものであつた。彼等はイスラエルが異邦人の軛の下に苦める間は、惡魔（サタン）の世であるとした。そして首さしのべて神の支配の行はれむ時を待つた。此點に於てもイエスは忠實なるイスラエルの子であつた。又彼は神の國を將來に待ち望んだのである。彼は「神の國近づけり」といつたが、「神の國來れり」とはいはなかつた。彼は弟子等にも其近づいたこと、神の國の福音を傳へよと命じた。弟子等は又「御國を來らせ給へ」と祈つた。今泣ける者は笑ふに至るであらう。今哀める者は慰めを得るであらう。「神の御代となならば」とは何れにも離れぬ條件であつた。最後の晩餐に於ても、彼は神の國に於て再び食卓を共にせむと弟子等に約束した。イエスにとつて神の國が將來のものであり、希望の對象であつたことは最早疑ひない。

併しながらイエスの福音は、之を正反對の要素を同時に含んで居た。神の國の現在といふ觀念に於て彼は全くユダヤ敎を超越した。「ヨハネは神の國が創始さるべきもので、人々奮鬪によつて得べしと語つた。然るにイエスは更に一歩を進めて、此國が現

に存在せることを說いて「見よ、天國は汝等の間にあり」と宣言した。將來の王國はイエスにあつては又現在の王國であつた。

路加傳を見ると、パリサイ人がイエスに神の國は何時來るかと訊ねた記事がある。其時イエスは、彼等が彼れの活動の眞の意義を悟らず、神の御代を唯將來にのみ待ち望めるを責めて嚴かに答へた。「神の國は只拱手觀望して來るものにあらず、又此處に見よ、彼處に見よといふべきものにあらず、神の國は已に汝等の中にあり」と。

ヨハネは唯おぼろに將來の神政を期待し、神が忠實なる働きの報酬として王國を下し給はんことを望みつゝ之が準備に力めた。然るにイエスは現に自ら之を有するを知り、且つ直ちに之を實現せしめた。又何等の外形的幇助を求めず、天軍の派遣をも祈願する所なかつた。彼は己が心深く新しき世を實現すべき神の力を經驗した。惱みにも罪にも惡魔にも死にも打ち勝ち得べき新しき生命が彼れに現はれたを知つた、其力其生命は未だ廣く行き渡らぬ。然も既に現存して居る。彼は神の國が自己の裏に有する如き心の性情に存するのを知つた。故に若し彼れと同じ性情が他人の中にも生じたならば、其時こそ神の國は既にイスラエルに來たのである。だから彼はいつて居る。「彼等先づ神の國と其義とを求めよ、さらば是等のものは皆汝等に添へて與へらるべし」と。而して人々をして斯かる王國に入らしめんとするに、彼は決してエッセネ派やヨハネがした樣な新しい慣習、新しい行事を立てなかつた。彼れには其言語以外、其人格に對する愛著以外に何等外形的方法の存するものなかつた。唯彼れを信ぜし者のみが王國をうべく、此の外には何人も之をうるの道なかつたのである。かくてイエス自人に於て將來のものは現在となつた。超越的のものは內在的になつたのである。「我れこそ神の國である」と深く信じたのである。

恁くて神の國の觀念は全く新しい形をとつた。神の國は世間的のものでなくなつた。ユダヤ人には終に神の國は來なかつた。イエスに從つた者のみに現れた。彼は己れに從ふ者にのみ、自身に現れた神的生命を分ち與へたのである。かくしてイスラエ

ルの忠實の子として古き神を顯はし、古き希望を實現せむとした彼は、不知不識の間に新しき世を顯はし、新しき世を開き、新しき希望を與へ、量らずして一の宗教を作つた。

第二節　メシヤの自覺

吾人は更に精細に考察せねばならぬ問題を持つて居る。イエスが果して自らメシヤなりとの自覺を有したかといふことである。原始教會の答は甚だ明白である。イエスはメシヤであり、又彼れ自身もさう考へたとは、初代の信者の動かぬ根本的中心的の確信であつた。問題は彼等の確信が果して同時にイエス自身の確信であつたかに存する。

凡そ何れの國民の歴史を見るも、久しい間多數の人心を動かして來た一の理想があつて、夫れが實現されるのは必ずや偉大なる人格の力であるが常である。ユダヤ國民

のメシヤ的理想も、イエスに至つて始めて人格となつて世に實現されたのであつた。神國を宣傳せむとの衝動は元よりヨハネから受け繼いだ。併しイエスは單に其宣傳のみに終らず又之を建設した。此王國には人格的中心を要すとは夙に預言者等も述べた。又イスラエル人も信じて居た。メシヤ的王國は即ちメシヤの王國である。ヨハネは自ら此の中心たらんことを要請しなかつた。寧ろ彼は其着手したる王國の存立には彼れ以上の力を要することを知つた。之に反してイエスは自ら神の國を現出せしめつつあるを自覺した。自らの力がよく之を組成する凡ての民を奴隷の境涯より脱せしめ得るを信じた。又イスラエル民族の期望を完うするに、他に待つの要なきを認めた。彼は元來田舍大工の息子であつて、宗教といふやうな專門の技術に於ては全くの素人であつた。然るに彼は國民の指導者なる學者やパリサイの徒を排斥した。律法を神意と敬重しながら凡ての權威、モーゼにさへ反對して「されど我れ汝等に告げむ」と冒頭して己自身を新しき權威と立てた。專門的宗教家から瀆神罪の譏を受くるをも顧み

す、彼は惱める者に「汝の罪赦されたり」との宣言を與へた。彼は總ゆる人間の中で自ら唯獨り神と特別の關係あるを斷言した。凡ての人間に對し、神の啓示者として特別の權威を主張した。質朴な田舍大工に過ぎない彼は近親のものから狂人と見られながら、「我れこそ神の代表者なり」といつたのである。奇怪にもイエスは自らメシヤと確信した。此自信、此自覺こそ彼れの宗教的活動の原動力であつた。其活動の結果ではなくて發足點であつた。彼れが其事業に着手した時、我れ慥かに此王國を現出し得べしと信じたりとせば、彼は又我れこそ其約束のメシヤなれと確信したに相違ない。吾人は進んで一層直接なる證據を求めよう。

既に前にも述べたやうに、洗禮者のヨハネは獄窓に物憂き月日を送つて居た時に、イエスの目醒しい活動を聞いて若しやと思ひ弟子等を遣つて問はしめた。「來るべき者は汝なるか、我等他に俟つべきか」と。イエスが此時に答へた言葉は曖昧ではあつたが、夫れとなく我はメシヤなりと仄めかしたものであつた。又後ちに說く如く彼が處刑せられた時、其の十字架には「ユダヤ人の王」といふ札が掲げられた。ユダヤ人の有司が彼れを自稱メシヤとしてピラトに渡し、ピラトは更に彼れを謀叛者として刑したは明かである。又彼はユダヤ人の法廷に於ても、メシヤの自信を吐露した。其のために彼は僞メシヤとして瀆神罪に問はれたのである。況んや彼れが國都イエルサレムに乘り込んだのは、メシヤとしてゞあつたことは說明を要しない。最後に注意せねばならぬことがある。彼れがメシヤをダビデの子孫となす學者の說を否定したことである。茲に起る問題はイエスが何んのために斯かる否定をしたか。彼は書齋でダビデの系圖を研究する學者ではなかつた。又徒らに學究的討論に興味を覺えたとは實らしくない。夫れが彼れ自身に直接關したことゝすれば一層自然である。彼れが自らダビデの子孫ならぬを知つて居たかは別問題として、兎に角己れの天職と信ずる所と、國民一般の信ずる政治的メシヤの觀念との不一致を感じて、彼れがメシヤたる自覺を辯護するため、學者や一般人民の信ずる所を駁したものと解釋すべきである。

斯くの如くイエスは自らメシヤなりと信じて居た。ナザレ村の田舍大工の彼は總ゆる國民の師表を排し、總ゆる人間の權威を斥けて、自ら神の權威を以て人に對した。偉大なる宗教的人格にあらずば、殆んど狂人である。そして歴史は彼が前者であつたことを證明した。

尤も彼は其事業を始むるに當つて、決して自己のメシヤたることを公告するを以て急務なりとはしなかつた。唯メシヤの使命に順つて王國を建設するを第一とした。從つてカペルナウムに現はれた初めの日より、權威を有てるものの如く行動したけれども、敢て其權威を主張することなく、却つて之を蔽はんとすらした。蓋し彼はメシヤなる名が、人々をして彼れの思想と全く隔絶したる聯想を起さしむるを恐れたからである。何んとなればメシヤの觀念は彼れによつて改造された。イエスの考へたメシヤとユダヤ人一般の夫れとは、凡ての點に於て必ずしも一致しなかつた。通俗のメシヤはローマ人を足下に踏みにじる世間的の王であつた。ソロモン詩篇の作者もいかめしい甲冑を着たる王をメシヤとして描いた。哲學者フイロー (Philo) さへ、メシヤを以て諸國民を征服すべき王者なるべしとして居る。然るにイエスは凡ての政治的觀念をメシヤから斥けた。夫れのみではない。彼はユダヤ人にとつてはメシヤの正反對なる苦難及び死をすら、己が天職の要素と考へるに至つた。之によつてユダヤ人のメシヤの思想は根柢より改造されたのである。斯かる思想を抱かしめるには、弟子等と雖も長日月の教導を要することであつた。否、恐らく彼等の一人もイエスの死後まで、終に了解するものはなかつた。況んや彼が公然自らメシヤとして名乘つて出た時の民衆の驚愕は畧推測されるのである。

イエスが一方には此名を彼れに加ふることを避けつゝも既に述べた如く、メシヤは必ずダビデの裔に出づべしとの思想に反對の態度を取つた所以のものは、此處に察する所あつたからである。人々がメシヤはダビデの血統に屬すべきものと考へて居る間は、到底王國の實現を以て異邦人に對する復仇、領土の擴張、イエルサレムの榮華、

天下統治の日となすを免れない。ダビデの紫袍、王笏が全く弟子等の胸中より除かるるに非ざれば、イエスがメシヤの名を明かすのは唯誤解を招くに過ぎないのである。夫れ故イエスは民衆の面前ラビ（Rabbi）の聽ける所で、ダビデの裔を翹望するの謬を正したのである。

併しながら彼れの注意にも拘らず、メシヤの名は竟に大なる誤解を免れなかつた。彼がヨハネに倣つて只王國の降臨を再び宣言するに止まるならば、其國民は王國の完成には他の後繼者を待つべきものと信じたらう。併しイエスは既に自ら此王國を掌握せるを知り、王國は彼れを信ずるによつて實現せらるべきを知つて居る。如何に待つともメシヤは別に來ることはない。故に彼は一方に王國の中心は己れたることを示しつゝ、然も夫れ等の謬想を防がんがために、メシヤに附せられたる稱號の中で最も卑しきものを擇んで採用した。即ち彼は自ら「人の子」と稱したのである。決して最も卑しきものではなかつたんだ

「人の子」とは元來イエスの母語たるアラマイ語に於ては唯「人」を意味したものである。夫れがダニエル（Daniel）の預言に神の國の象徴として用ゐられて以來、ユダヤ人の宗教的希望と結び付いて、後にはメシヤの別名とせらるゝに至つた。福音書に見える「人の子」もかの天の雲に乘つて現はるゝ超自然的メシヤを意味するのである。イエスが此稱號を用ゐたのは、必ずしもメシヤを以て自ら任じたからではなかつた。併し此名が弟子をして彼れが其王國に於ける特別の地位を思はしむるに至つたことは彼れの多くの言葉の中に讀める。例へば「人の子は地に於て罪を赦す權能をし、安息日にも主たるなり」といふ如き類である。恁くて彼は一日又一日漸次に質素なる法教師の服を脱して行つて、終にカイザレア・フイリピ（Caesarea-Philippi）に於て、約束せられたる神の人として、光彩赫耀たる姿を以て弟子等の前に立つに至つた。尤も彼は多くの場合に、我れといふべき所を如何にもよそよそしく人の子といつて居る。つまり彼れの心の秘密は人の前にさらけ出すには、餘りに微妙であつたのである。

第三節　神の觀念

吾人は更に進んでイエスが示し顯はした神を考察しよう。

ユダヤ人の神は憤怒責罰の神であつた。然るにイエスのは愛の神であつた。バプテスマのヨハネが傳へた神の國は、畏れを起さしむる音信であつた。然るにイエスの宣べた王國は喜ばしき福音であつた。ヨハネは判別し罰せんがために來る審判者のことを語つたのに、イエスは罪人を受けて之を赦す父の心を傳へた。

古今を通じてユダヤ教の根本假定であつて、又總ゆるパリサイ的儀禮の動機であつたものは、神は執念深い神であつて祖先の罪惡を罰して其子孫三世四世にまで及ぶとの信念であつた。パリサイの徒は幾百となき煩多な戒律を守らむがために忙殺された。エッセネの徒は全く孤獨幽棲の中に苦行した。サドカイの徒は殿堂の典禮を自ら誇とした。民衆は自ら神を離れ、神また彼等を棄てたりとの觀念を抱いて憂慮した。

是等は皆彼等の信仰が神を憤怒責罰のものとして恐れたからである。ヨハネは下らむとする斧、來らむとする怒に就いて告げたことは外の人よりも甚しかつた。イスラエルの學者達は皆これがために騷ぎ立つて居た時に、恰も新たなる預言者は世に出て彼等が未だ曾て耳にしなかつた言を齎した。曰く、「神は人類の父であつて世の初めより彼等を愛したり」と。而してイエスは之れが證として野の百合、空の鳥を指して語つた。「夫れ永遠渝らざる同情は常に世界の上に注がれ、永遠渝らざる仁愛は世離れて靜けき丘のべにも、事煩はしき巷の生活の上にも等しく守りの手を垂れ給ふ」と。昔イスラエルが怒の神と認めたものは、今や彼れには友たり又父であつた。他の人は神が峻嚴にして祖先の罪惡を子孫三四代にまで報いるを見たのに、彼は此神が日を善き者にも惡しき者にも照し、煩へ悶える心の祈禱にも耳を傾けるのを見た。イエスにあつては神は吾人の罪を赦す父であつた。彼れの弟子等は師の教へに從つて日々「父よ罪を赦し給へ」と祈つた。彼はいつも神を父と呼び、弟子等にも父と呼ぶことを敎へ

た。

神に關する此新見識は又全く新たな宗教的世界を拓き出した。若し人類の尊崇する神が憤怒責罰の神ならば、宗教の事業は其怒を和ぐるにあるのみで、種々なる犧牲と祈禱と禁慾とから成るだらう。之れに反して若し神が人類の父であるならば、唯一の宗教的本務は只愛あるのみである。イエスの神は罪人即ち敵をも愛した。彼は己れの敵なる罪人をも包含する無限な神の愛を、彼れの最も美しき譬喩に言ひ顯はした。「父に背き父を見棄てゝ放蕩逸樂に耽つた息子が一度び悔い改めて歸り來るや、父は溢る喜びに我れを忘れて彼れを迎へる」と。イエスは神の愛を己が生命とし、夫れを顯はし示すを己が天職とした。神意を誤れる專門的宗教家を猛烈に攻擊して、彼等の覺醒を促すを己が任務とした。而して彼は神の繼子視せられて迷へる民衆や、半異邦人として禽獸視せられた稅吏や、賣春婦や、姦通罪を犯した婦人や、其他凡て迷へる者には自ら求めて慰めてやつた。

次にイエスの神は活きた人格的の神であつた。ユダヤ教にては活きたる神は理論に止り、實際には煩瑣なる律法の死文に化石して了つた。彼等は只神の國を將來に待ち望んだ丈けで、活きたる神を何處にも經驗しなかつた。夫れを經驗したのはイエスである。彼れには神は最早將來のものではなかつた。超越的のものではなくて活きた現實となつた　而して其神は精神的の實在であつた。彼は凡て外形的儀式的の事柄に重きを措かなかつた。祭壇の供物を等閑にしても同胞と和らげと教へた。律法の死んだ偶像をすて、外面的機械的の行爲を去つて、活きた精神的の神に仕へるには、天の父の如く完全なる人格を養へと教へた。同時に彼は「悔い改めよ」と呼んで人々の覺醒を促した。最後の審判は彼れの說教から離すことの出來ない要素であつた。彼はユダヤ人と同じ樣に、サタンの國が滅び、死人は復活し、凡ての人間の運命が神の國と地獄とに分かるべしと信じて居た。併し彼れの說教は地獄を遁れむ爲の手段を教へたものではなくて、各人をして永遠の責任を明かに自覺せしめむとしたのである。アポカリ

プシスの著者のやうに、世界の終末の徴候などを研究することは、彼れには價値なき問題であつた。たゞ彼は世の終りの近づけるを説いて一層責任の念を強め、又突如として來るべきを説いて、何時來ても差支なき覺悟を促した。其の結果審判の觀念より全く國民の政治的希望を遠ざけた。ユダヤ人であるないは、人間の永遠の責任及び運命と何等の關係もない。神の前には連帶責任、連帶賞罰は許さぬ。個人は凡ての責任を自分の肩に擔はねばならぬ。イエスは勿論ユダヤ人以外には説教しなかつたが、彼はユダヤ人に於て人間、個人を見たのであつた。而してユダヤ人の固有なる黨派根性を全然排斥した。斯くて何人も自分の責任を自覺し、悔い改めて神にかへらねばならぬと諭した。悔い改めた一人の罪人を、神は九十九人の義人にもまして喜ぶのである。と言つたのである。

第四節　祈禱と教訓

イエスの名聲次第に高まり、老いたるも若きも男も女も狂せむ許りの熱心を以て彼れを迎へるやうになつた。彼は精神の散漫にならむを恐れ、時々群衆を避け人なき處に獨り神に祈つた。

茲に注意せねばならぬことがある。夫れは吾人の祈禱に於て重要な位置を占める部分が、イエスの祈禱には全然ないことである。彼は祈禱する場合に自分の罪惡を感じて煩悶し、之がために赦しを哀願することは絶へてなかつた。外の人々は多く自己の罪を感ずるからして、其祈禱は主として懺悔であつた。然るにイエスの祈禱は熱心であつて苦悶し、流涕するけれども、一言として罪を懺悔したるものがない。彼れの祈禱の最も長文なるものに就いて見るも、其冒頭に罪を懺悔する辭句はなくて、却つて己が正義を主張する態度が讀める、曰く。「我れ爾の榮を世に顯はし爾の我れに委ねし業は我れ之を成せり」と。

次に驚くべきは彼は屢人のために祈り、又人の前で祈つたけれども、人と倶に祈つ

たことは全くなかつた。彼は俱に一堂に會して祈ることを好むものである。彼れも共同の祈禱を奬勵して「二三人の集れる處には我れも其處にあるべし」といつて居る。然るに彼は弟子等と共に「我等の神よ」と呼んで祈を捧げたことはなかつた。己れと弟子を總べて神に對し「我等の父」と云つたことはない。必らず其間に區別を立てゝ「汝の父」「我が父」とか、或は「汝の神」「我が神」といつた。そして彼は幾度となく弟子のために祈つたけれども、弟子に向つて我がために祈れとは曾ていつたことはなかつた。

夫れからイエスが權威を以つて語つたことは忘れてならぬ。之も時人を驚かした。當時の學者は他人の權威に據つて敎を立てるのが常であつた。彼等は好んで口傳的の釋義を引用した。前人の見解に訴へて聽く人の同意を得んと求めた。然るに獨りイエスは自己の權威に基いて、「されど我れ汝等に告ぐ」といつた。學者は自家の意見が反對を以て迎へらるゝことを豫期し、又縱し當面から反對を試みずとも、新奇なる眞

理に對して人は陰然反抗の念を蓄ふることを假定し、此の反抗に當るべき手段を講じた。先づ典據を引用して論陣を張り、之を以て勝つ能はざれば、感情に訴へて敵壘を陷落せしむる策を採つた。イエスのは之と異つて居る。彼は偏見に訴へず、感情に歩を讓らず、自ら懷抱する所は直ちに之を眞理として語り、多く議論せず、却つて「我れを信せよ」、「我れに從へ」と宣べた。彼は舊約書を引照することはあるも、然も之を引照しながら自ら夫れ以上に立ち、其證認を求めつゝ、却つて夫れに證印を與ふるの風があつた。昔の預言者は自ら神の立證者たるを以て本分とし、自分を穩して神に訴へ、「神が恁く云ひ給ふ」と傳へた。然るにイエスは自己以外の保證を假らない。彼は權威を以て人に命令した。彼は決して助言しない。「汝若し同意ならば」とは云はぬ。彼れの言は命令である。法律である。儼然たる大權の批准を帶んで居た。

是等の權威にも拘はらず、不思議にもイエスは神に對して謙遜（ヒユーミリチー）（Humility）であつた。自ら萬人を排して唯獨り神を識り、神に識らるゝと信じた彼は人物崇拜には全

く反對であつた。善き師よと呼ぶ者に對して、彼は「何故に我れを善しと呼ぶか、善きものは唯だ神あるのみ」と答へて居る。彼れの祈禱は謙遜と信頼との念に充ちて居た。彼は自分のためには神の特別の愛顧をだに請はなかつた。この謙遜あればこそ、彼れの權威は正しき意味を持つのである。彼はもだし難き神の召を受け、謙遜と信頼とを以て神意の實現を我が天職と信じた。夫れ故自分に對しては崇拜を斥けながら神意の貫徹と信ずる場合には、獨り特別なる資格を主張し、神の權威を以て人に臨んだのである。

さて祈禱の事は多く路加傳に記載されて居る。イエスが洗禮を受けた後に祈つたこと。癩病人を潔めた後に野へ行つて祈つたこと。十二使徒を選任する前夜は徹宵祈禱を捧げて居たこと。彼れが祈をして居る中に變貌の不思議の起つたこと。弟子がイエスに祈ることを敎へ給へと願つたこと。祈りの義務を敎ゆべき二個の譬喩—寡婦の譬喩と麵麭の譬喩—を語つたこと。イエスがペテロの信仰の動かざらんために祈つたこ

と。己れを殺す者のために祈つたこと。是等の記事は悉く此の福音書に見えて居る。

次にイエスの敎訓の目的は、人間を改造して彼自身の如く、父の意を我が意とする神の子たらしめむとするにあつた。彼は神に遠ざかれる人を神に導き近寄せ、神に於て其人格を完成し、本分を成就し、從て終極の滿足と完全の幸福とを得しめむとした。彼は律法を神聖視した。然も實は其精神を超越し、時としては批評を敢て加へた。終生律法の一字一句に拘泥し、字句の研究にのみ齷齪として、毫も其精神を讀む能はざる當時の專門的宗敎家に向つて宣した雷の如き彼れの一言、「汝等未だ讀まざるか」は慥かに彼等の膽を寒からしめたに相違ない。イエスは彼等の義を排斥して一層優つた義を主張した。其優つた義とは愛であつた。彼は愛を以て神意の根本とし、其他を凡て枝葉とした。此愛の精神は彼れをして味方と敵との區別を超越して、凡ての人間に於て神の前には等しく價値ある個人を認めしめた。馬太傳に見える次の句は有名な彼れの敎訓である。「されど我れ汝等に告げん。汝等の敵を愛し、汝等を詛ふ者を祝

し、汝等を憎む者を善くし、虐遇迫害ものゝために祈れ。」

更に進んで、彼は行爲の外面に現れた部分よりも其の源泉に遡つた。彼は會堂に立て宣べた。「古誡に姦淫する勿れといへるは汝等の聞ける處なり。されど我れ汝等に告げん、婦を見て之を犯さむとの情を起すものは其心既に姦淫したるなり」と。彼は性情の表出に過ぎないものよりも、直ちに性情其ものに遡つた。凡ての行は性情の如何に依り、罪の源は皆茲にあるからである。「人如何でか荊棘より葡萄をとり、薊より無花果をとらんや、凡て善き樹は善き果を結び、悪しき樹は悪しき果を結ぶ」。恁く衷心の至情を重んじたイエスは、パリサイの徒の僞善的宗敎に全然反對した。

最後に一の挿話を紹介しよう。

或る日イエスが早朝から會堂で道を說いて居た。時に例のパリサイの徒は、姦淫を犯して居た現場で執へた婦人を曳いて來て群衆の中に据ゑ、偖イエスに難題を持ち出した。蓋しモーゼの律法に依ると、姦淫せる婦人は石にて擊殺さるべき規定であつた

から、イエスが之を赦せと云へば律法を破ることになり、之を殺せと云へば彼れの無慈悲となるからである。彼等は云つた。「師よ、此婦人は姦淫せる者なり、モーゼの律法は石にて擊殺すべしと命ず、師の高見を承らん」と。恰も其の折イエスは身を僂めて指で地に字を書いて居た。初めは彼等の質問を取り合はなかつたが、切に詰問するので止むなく身を起して答へた。「汝等の中にて罪なき者先づ彼の女を石にて擊つべし」と。言ひ畢つて彼は再び身を僂めて地に字を書き續けた。此言を聞いた彼等は良心に責められて、老いたるを始め若きまで一人往き二人逃げ、遂には悉く去つて殘るは唯イエスと婦人のみとなつた。此時彼はやをら身を起し、其處に引き据ゑられてある婦人に云つた。「婦人よ、汝を訴へし者は何處に去りしや、汝の罪を定むる者なきや」。「主よ、誰もなし」。「我れも亦汝の罪を定めず、とく往け、再び罪を犯す勿れ」。

第六章　奇跡

第一節　傳說の奇跡

イエスが人氣を得たに二つある。一は平易なる說敎をして國民に解り易からしめ、然も猛烈なる誠意を以て深大な印象を與へたことである。他の一は、彼れが單に說敎ばかりでなく、業を以て人を助けたことである。奇跡（ミラクル）（Miracle）を行うたことである。彼は聾者や、盲人や、癲病人や、其他不愍な者を見て愛の心を抑ゆることが出來なかつた。夫れで神に向つて之を醫すことを祈つた。又神の力で之が出來るものと確信して、實際に之を行つた。

吾人は先づ順序として、福音書に記されてある所謂奇跡なるものを次に記さねばならぬ。

一　カナの奇跡　イエスの說敎を傾聽すべく人を喚び醒す宇宙の大鐘は此日を初めとして撞き出された。ガリレアのカナ（Cana）といふ町に祝言があつた、イエスは母マリヤ及び弟子と共に招待されて出席した。然るに祝言の最中に酒が盡きたので、マリヤはイエスに告げて暗に奇跡を行ふだらうと待つた。併しイエスは時未だ到らずとして斥けた。さて席の邊りに、ユダヤ人が平生身を淸むるために備へ置く二三斗入りの石瓶が六個横たはつて居た。でイエスは奴僕に命じて其石瓶に水を滿たさしめ之を司鑑者に渡さした。然るに不思議にも其水は變じて美酒となつた。是れ彼れの初めて行つた奇跡であつて、マリヤの願に應じたものである。

二　漁獲の奇跡　或日イエスがガリレアの湖畔に立つて居ると、群衆が走せ集つて來て道を聽かんと請ふた。で彼はシモン、ペテロの船に乘つて岸を離れて說敎した。さて說き畢つてから沖に漕ぎ出してシモンに網を下ろして魚を漁れと命じた。シモンは終夜漁業に從事したが一尾も獲なかつたことを告げたが、仰せなれば今一應試みんと再び網を下ろした。ところが驚くべし。今度は大漁にて網が裂ける位いであつたの

で、他の漁舟に居たヨハネとヤコブの兄弟を應援に頼んで引き上げて見ると、魚が二艘の船に溢れて船も沈まん許であつた。そこで彼等はイエスをば不思議な人だと思ひ、驚いて彼れの足下に平伏し「我等は罪人なれば離れ給へ」と言つた。イエスは「恐るゝ勿れ、我れに從へ、我れ汝等をして人を漁どる者となさむ」と宣べた。此言に動かされて彼等は船を岸に寄せるや、網も船も打ち捨てゝ直ちにイエスに從つた。昨日まで魚を漁どりし者、今日は忽ち變じて人を漁どる者となつた。

三　ナイムの奇跡　イエスがナイム（Naim）といふ村へ往くと民衆が續々隨つて來た。さて村の門に近づいた時に、寡婦の獨り息子が死んだといふので、今しも葬送の所であつた。母なる人は太く悲み、涙に咽びつゝ柩の後ろに歩み、多くの村人も會葬した。イエスは之を見て同情に堪へず、「泣く勿れ」といつて手を柩に置いたので舁者は立止まつた。「若者よ、我れ汝に言ふ、起きよ」。言葉に應じて死者は直に坐つて物言ひ初めた。恁くてイエスは之を母に與へたので、衆人は之を見て恐怖の念に襲はれつゝも、「大なる預言者我等の中に起りぬ、神は其民を眷み給へり」と贊嘆の聲を放つた。

四　ベッサイダの奇跡　ベッサイダ（Bethsaida）の池の周圍に五棟の廻廊があつて、其中には夥多の盲者、蹇者、中風患者等が臥して水面の動くのを待つて居た。水の動くは天使が時々此池に天降つて之を動かすからである。其時劈頭第一に池に下りた者は病の如何に拘はらず忽ち癒ゆるといふ。さて玆に一人の沈痼に罹れる者があつて、三十八年の久しきを經て今になほ癒えない。イエスが臥せる彼れを見て其病の久しきを知り、「汝は病の痊えむことを欲するか」と訊ねると、「主よ、水の動く時誰も我れを扶けて池に下す者なし、我れ自ら往かむとする間に他の人我れより先きに下るを奈何せん」と彼は答へた。「起て、臥臺を携へて歩め」とイエスの言の下に、病人は立ろに病癖え臥臺を携へて歩み初めた。

五　ラザロの奇跡　イエスは友として愛せるラザロ（Lazarus）の墓に往つた。する

とラザロの姉妹二人が側で泣いて居る。又傍に居たユダヤ人も悲しんで居る。一には罪の力の勝てる結果として世に死あるを怒り、一には悲しむ者の誠の涙に同情して彼は自らも泣いて叫んだ。「ラザロよ、出でよ」と。彼れの兩頰は同情の涙に濡ひたるも、聲は墳墓の暗黑を貫いて死の冷かな鈍き耳朶を打つた。死せる者は布で包まれたまゝ出て來た。後にアウガスチン(Augustin)が云つた言葉は特に記憶に價ひする。「イエスは特にラザロの名を指して呼びぬ　盡くの死人の出で來らぬために」。

六　ヤイロの奇跡　マタイの家に招かれてイエスが夕餉の席に着いて居た折しも、突然入り來つたのは會堂の主幹者ヤイロ(Jairus)といふ者であつた。彼れには愛する娘があつて、今年は東方で成女の齡である十二歳になつたが、重病に罹つて危篤に陷つたのでイエスに嘆願しに來たのであつた。イエスは請に從つて打ち連れて早や暮れ掛つた街路を急いだ。然るに途中で復もや一人の病める婦人に歩みを停められた。此婦人は十二年間血漏の病に罹つて治療のために産を蕩したが、些の効驗もなく、病は重るのみであつた。此病は不潔な病として忌まれ離婚の理由ともなるのである。今や此婦人は顫へる指もて窃かにイエスの衣の裾に觸れた。力はイエスの身に傳はつた。イエスは振り返つて誰れか我れに觸れしやを問ひ、婦人をして白狀せしめた後に、「汝の信仰汝を救へり、安全にして往け」の語を以て送り歸した。恁かる間もヤイロは時の移るに心躁ち、娘は若しや綜切れたるにあらずやと氣遣ひつゝ、イエスと倶に門口に着けば、慟哭の聲は早や外に聞えた。娘は既に死んだのである。併しイエスは「女は死せしにあらず、寢ねたるのみ」と云つて室に入り、女の手を執りて蘇生せしめて之を兩親に渡した。此の有樣を見て茫然石の如くなれる人々に彼は周密な注意を以て食物を與ふべきを命じた。

七　湖上の奇跡　或日イエスが弟子に命じて、己れより先きに船に乘つて湖水を渡らしめ、自らは祈らむため獨り山に登つた。然るに一方沖合で弟子等の船は逆風の爲浪に漂はされた。其夜の四時とも覺しき頃イエスが波上を歩むで船に近づいて來た。

之を見た弟子等は驚いて幽靈なるべしと懼れ叫んだ。イエスが「安心せよ、我れなり、懼るゝに及ばず」と云ふとペテロは「果して主ならば我れに命じて水面を踏みて主の方に到らしめよ」と答へた。でイエスは「來れ」と命じた。ペテロは船を降りてイエスの方へ往かうと水面を歩み出したが、風が激しいので懼れ、遂に溺れむとしたので「主よ我れを救ひ給へ」と叫んだ。イエスは直ちに手を伸して引き揚げ、「信仰の薄き者よ、何故疑を抱くや」と言つて船に乘せたら、頓て風は歇み波は靜まつた。

八　麵麭の奇跡　或日イエスは人を避け淋しい處へ往つた。然るに群衆は雜踏して彼れに押し迫つて來たので、イエスは之を憫み、群衆人の目に觸れむため山に登つて坐し、弟子等と共に道を說き、且諸種の病人を醫した。恁くて早や日も暮れんとしたので、弟子は衆人を一先づ去らしめ夕食を求めしめんとイエスに云つた。するとイエスは「去らしむるに及ばず、汝等之に食を與へよ」と宣べた。然るに其處にはガリラヤ村民の常食とする黑麵麭五片と、二尾の魚を持ち合はすのみであつて如何ともすることが出來なかつた。併しイエスは兎に角其を携へ來らしめ、弟子に命じて民衆を草の上に列ばしめた。其人數は婦女子を除いて無慮五千人もあつた。時にイエスは五片の麵麭と二尾の魚を取つて、天を仰いで謝し、麵麭を割つて弟子に渡し、弟子は更に之を民衆に與へたのに、孰れも皆食して飽くに至つた。加之イエスは殘餘の屑を拾ひ集めしめたら、十二の籠に盈ちたといふことである。

九　山上變貌の奇跡　或日イエスは弟子のペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴つて祈らむためにタボールの山巔に登つた。然るに祈禱の最中に、イエスの容貌は忽ち變つて、顏面は太陽の如く輝き、衣は雪の如く白くなつた。そしてモーゼとエリヤ（Elijah）が其左右に示現して、不日イエスが萬民のために死を受くべきことを語り合つた。ペテロは之を見て呆氣にとられ聲を發して云つた。「主よ、我等此處に居るは樂し、若し肯ひ給はゞ此處に三つの蘆を建て、主とモーゼとエリヤのために獻げん」と。折りしも光雲彼等を包み空中より聲あつて「之は深く我が意に愜ふ愛子なれば善く之に聽くべ

し」と曰ふ。弟子等は大に懼れて地に俯伏した。時にイエスは近寄り、彼等に手を觸れて「起きよ、懼るゝ勿れ」と告げたので、初めて目を擧げて仰ぎ見たが、既に其の時はイエス一人のみで他に何人も見えなかつた。下山の途中イエスは彼等に口止して云つた。「人の子の死より甦るまで、汝等の目擊せしことを誰にも語る勿れ」と。是れ所謂變貌（トランスフィギュレーション）（Transfiguration）の奇跡である。

第二節　奇跡の說明

「奇跡あり得べきや否やは既に人格を具へたる神を信ぜる人には疑問にあらず。又奇跡の實在せることはイエスの神たるを信ずる人には疑問にあらず」。恁かる說明に滿足せる時代は既に去つた。吾人はより妥當な說明を要求する。

近世啓蒙思潮の人々が最も甚しく躓いたのは、此奇跡の說明であつた。彼等は奇跡が自然律を破壞するといふ前提から發して、合理的に說明せむと試みた。左に二三の例を擧げて見よう。

一、超自然的出生。父がなくして子の生れる道理がない。然らばイエスの父は誰れか。天使であつた。何者かゞ天使に扮してマリヤを欺いたのである。

二、湖上の奇跡。人間が水面を歩み得る道理がない。イエスが湖上を歩んだといふのも實は波の水際を歩んだのである。

三、復活の奇跡。死人が復活する道理がない。イエスが復活したといふのは虛だ。夫れは彼れの死後弟子等が巧に其死骸を墓場から盜み出して、復活したのだと言ひ振らしたのである。

是等の說明は傳說の盲信を打破する上に、大なる功績があつたことは事實である。併し彼等は歷史的の理解力を全く缺いて居て、福音書の奇跡談を其時代の信仰思想から解釋することが出來なかつた。福音書は決して純粹の歷史書ではない。然るに夫れを悉く史的事實の記事と思つて、合理的說明を試むるなどは大なる間違である。又現實をのみ重んずる今日の世界觀を以て當時の詩的想像の世界觀にまで手を出すのは宜

しくない。當時の人々にとつては、心情の奇跡は同時に外界の奇跡と現れた。イエスをメシヤであると崇拜した人々には、何事も不可能とは思へなかつた。恁くて彼等熱心なる信者の頭から奇跡談の或ものは産出したのである。「斯くもあつた筈である、故にさうあつた」とは、斯かる宗教的想像の無意識的の論理であつた。彼等は後になるに從つて、自分等の信仰より割出して、新事實を追々と無意識的に製作して行つた。

次にユダヤ人は、エホバが必らず其預言者をして奇跡をなさしめ給ふべしと信じて居た。「何等かの休徴を示せ」とは、彼等が幾多の自稱預言者に要求した聲であつた。エッセネやラビの徒は咒を念じ、妖を行ひ、或は不思議な幻術で以て病を癒やさんとした。然るにイエスは唯其人格の感化力と、其言葉の力とに依てした。彼れが病人の前に立つて一言を下せば、病人は彼れが神よりの權威を持てるものなるを信じ、夫れより生ずる興奮に依つて癒ゆ〻のである。從つて彼れと病人との間を繋いだものは信仰の鎖であつて、夫れが時には恐懼となり、時には信頼となつて發現した。凡て信仰は特に助を求める場合になると、千百倍の力を持つて來る。彼等病人の意思は、豫め疾病の平癒に必要な丈けに興奮すべき狀態にあつたのである。此の民心を支配して居たイエスを信仰する興奮狀態こそ、彼れをして効驗を現はさしめた所以である。其の反對に民衆がイエスを信ずることなければ、決して奇跡の行はるべきものでない。現に初代の史的記錄は、明瞭に且つ公然と不信仰なるナザレ村民の間に於けるイエスの治癒が失敗に終つたと記載して居る。「彼れ茲には數人の病者に手を置きて之を癒し外、目醒しき業をなすこと能はず。イエスは彼等の不信なるに驚きぬ」と。

ユダヤ人の間にあつては、苟も預言者たるものは必らず奇跡を行ふものと考へられて居たことは前に述べた。彼等はイエスの未だ言ひ出さない中に押し寄せて來て奇跡を迫つた。併し彼は奇しき業其ものを、我が成功の手段とはしなかつた。從つて人から促されても斷然拒絶した。彼は唯同情の精神から奇跡を行つたのである。そして信

仰のある程度に應じて其効驗が現れた。「汝が信ずる如く汝に成れ」。「汝の信仰は汝を救へり」。是等は信仰厚き病人にイエスが宣した言葉であつた。怎くてイエスは治癒の奇跡を以て、自らの衷に働ける特殊不可思議な力に歸せずして、專ら病者の心的狀態に歸した。從つて其の成効しない時にでも夫れを自分の過失とは感せずして、單に彼等の不信仰に驚いたに過ぎなかつた。で又一旦は病癒へ惡鬼去つた後に、其の張り詰めし氣の弛みと心の喜とのために、再び治癒の力の失せ去りし如き者もあつた。

イエスは此事實を說明して、病者が惡靈の新なる襲擊を防ぐ力なき故なりとした。

イエスが貴むだのは內に神の國を有した者に限つた。民衆の驚嘆を買つた奇跡力も以て彼れの使命を證するには足りない。神の國を接くるものこそ是れ弟子であつて、自餘のものはさうでない。故に彼は好奇心に驅られた民衆の愈多く集つて來るのは、決して神國の擴張にあらずとし、其治癒の事々しく言ひ擴めらるゝを禁じ、勉めて彼等の群衆より逃れんとしたのである。

第七章　論評

第一節　民衆の態度

イエスの新事業が漸次顯著になるに及んで、イエルサレムの專門的宗敎家は學者をカペルナウムに派遣して、此新預言者の擧動を視察せしめた。是等の密使は巧に群衆に混じてイエスの後ろに從つた。然るにイエスが惡鬼のために物言ふことの出來ない病人を醫したのを見るや、彼等の一人は憤怒に堪へず、「彼は惡鬼の王なるベルゼブルによつて惡鬼を逐ひ出すなり」と叫んで、猛烈と妨害を試みた。併し民衆は眼前に現れたる奇跡に打たれて益彼れの周圍に押し寄せたので、彼等の妨害も更に効がなかつた。然るに意外なる妨害が起つて、イエスは暫らくカペルナウムを去ることになつた。

彼れの故鄕ナザレ村でも、イエルサレム同樣に其行動に注視し始めた。特に最も親

しい縁戚は、一大工に過ぎないイエスが自ら預言者或は預言者以上を以て任ずるのを
什ふしても了解出來なかつた。イエスの兄弟は彼れを狂氣したと考へて、其母及び姉
妹と約二日路を距てたカペルナウムに來て、親しく實情を確めむとした。彼等が到着
した時は、恰もイエスがペテロの家に群がれる民衆の狂熱の中にあつて、パリサイ人
と議論を戰はして居て民衆の擾々は愈甚しかつた。夫れで益イエスを狂せりと思ひ込
んだ彼れの兄弟は、往つて之を捉へようとしたが、群衆に支へられて達することが出
來なかつた。それと知つた或る人がイエスの言を遮ぎつて、「見よ、汝の母及び兄弟姉
妹汝に面會せむとて來れり」と告げた。でイエスは「我が母は誰ぞや、我が兄弟は誰
ぞや、凡そ神の聖旨を成すものは皆我が母、兄弟姉妹なり」と答へて、直ちに此處を
去つた。彼は湖邊に下つたが、民衆の集り來るや、船の舳に立つて又さま〴〵の譬喩
を語つた。軈て黄昏になつたが、再び煩はしき事の出態せんことを恐れてカペルナウ
ムに歸らず、船を對岸閑寂の地へ着けた。傳へられたる湖上の奇跡は此日の出來事で

ある。

其後彼は暫くガダラ市に足を留めて居たが間もなく歸つて、從前のやうに說敎と醫
癒とに日を消した。此間主として彼れの居た場所は、カペルナウムに近い小邑コラジ
ン、ベツサイダ、ダルマヌダ及びマグダラ等であつた。かかる中に早や夏も過ぎて秋と
なつた。彼は曩に其家族の誤解をうけたにも不拘、故郷を訪ふことを忘れなかつた。
夫れのみでない。彼は故郷の會堂に入つて公衆に語るの機會をさへ捉へた。其友人、
兄弟、姉妹の前で堂々と其メシヤ的使命を宣べた。彼等はイエスの口より出づる言葉
の聰明に驚いたけれども、其兄弟姉妹を熟知して居るので、什ふしても彼れを預言者
と信ずることが出來ずして言つた。「こは大工にあらずや、其母はマリヤ、其兄弟はヤコ
ブ、ヨセ、ユダ、シモンにあらずや、其姉妹も亦我等と偕に在るにあらずや」と。イエス
の力も茲に奇跡を行ふ能はず、彼等の不信仰なるに驚いた彼は「預言者はその故郷、
その緣戚、その家の內に於ては尊ばるゝことなし」との言を殘してナザレを去つた。

失れから彼はゼズリールの廣漠たる平原を横ぎつて、遠くサマリヤの諸邑を廻つた。十二人の弟子は、二人宛相伴つてガリラヤの村々に往つた。彼等は腰には一の財嚢をも著けず、足には一の靴を穿たず、極めて質素な裝して、華麗豪奢な人々の間に神國の近づいたことを宣傳し始めた。それでイエスの名は啻に其故國の村々に知れ亘つたのみでなく、遠くテベリヤのヘロデ王の宮殿中にまでも及んだ。此新現象はヨハネを殺戮した此の王の眼に、猜疑の念を以て迎へられた。王の計畫はイエスのガリラヤに留るを好まなかつたパリサイ人に依て、不思議にも密告された。彼等は急ぎ來つてイエスに警告した。「汝遁れて此處を去れ、ヘロデ汝を殺さむとす」と。イエスは徐ろに答へた。「往きてかの狐に告げよ、我れ今日及び明日は鬼を逐ひ病を醫さん、而して三日間には吾事了らん」と。又パリサイ人の方に暗譏の流眄を注いで云つた。「されど我れ今日明日また其次の日までは歩まざるべからず、そは預言者はイエルサレムの外にては殺さること能はざればなり」と。

斯くてイエスは船に乘つて其處を去り、フイリピ領の地に避難した。弟子等も亦集つて來て、バチーヤーの野は一時王國の民を宿した。然るに學者等は前以て此僞預言者の行動監視の任務を負びて居て、決して其敎敵の姿を見失はなかつた。彼等はイエスの弟子等が手を洗はずして食する所を捉へて攻擊の材料となし、非難の矢を此處に放ち始めた。「何故に汝の弟子等は古老の遺敎を破りて其麵麭を食ふ前に手を洗はざるや」。イエスの答は冷靜であつて、辯護に代ゆるに却つて非難を提供した。「何故に汝等は其傳說のために神の誡を犯すや」と。弟子等は此激論の結果に恐怖の念を抱いて、「イエスがペテロの家に歸るや「汝はパリサイ人が此言を聞きて憤りしを知るか」と繰り返した。夫れでイエスも止むなく一先づガリラヤ地方を去らむと決心し、十二人の弟子と共にシドン、チル指して遁れた。彼はチル市で、其交を全く弟子との間に限つて一時世人との交渉を斥けつゝ、更にまた四時綠蒼々たるフエニキヤの沃野を經て、シドンの海邊に落ち延びた。蓋し之は暫時敵の攻擊の靜まるのを待たんがためで

あつた。

長き漂泊の後、イエスがガリラヤ湖の近くに歸つて幾許かの日子を費した。バリサイ人がイエスに向つて、「神國の來らむは何れの時ぞ」と訊ねたは、彼れが再び故國で活動を開始せむとする時であつた。民衆の歡呼はバリサイ人の妨害にも拘はらず、依然として彼れを煩はした。總ゆる村々から遠近を論せず彼れの身邊に詰め掛けた。彼れが湖を渡つて對岸の地に往けば、民衆は陸を廻つて附いて來た。又彼れが平原に出れば待つて居て之を迎へる。婦人は其子を携へ、病人は床のまゝ擔はれて來る。其數は時として四五千人にも及んだ。彼等は神の國の見在の證として頻りに休徵を求めたが、イエス之を斥けた。そして却て自ら靜かに修養を積まんがため、度々寂寞の地に民衆を避けた。恁かる新奇にのみ曳かれて馳せ集つた民衆の熱心が、時と共に冷却するのは當然である。「あゝ禍なるかな、コラジンよ、ベテサイダよ、カペルナウムよ」と、彼れが叫んだに徵しても如何に苦がき經驗を彼れが嘗めて來たかは思ひやられるのである。

第二節　バリサイ派

イエスは決して新しい宗教を開かうとした者でない。只父祖に約束せられた神意の實現を齎らし、イスラエルの宗教の眞髓を發揮せむとしたのである。夫れにも拘はらず、否むしろ其ために、彼は宗教の内的生命を失はむとした當時の專門的宗教家殊にバリサイ（Pharisee）派の人々と衝突した。

バリサイ派の人々をまづ驚かしたことは、律法の形式に對するイエスの態度であつた。尤も律法遵守を過度に强ゆることを非難したものは既にイエス以前にあつた。例せばサドカイ人は、バリサイ人が絶えず身を潔めることに熱中せるを嘲笑して、「バリサイ人遂に我等のために太陽をも潔めんとす」と云つ居る。併しイエスの見解に依ると、ユダヤ教の儀文は悉く破壞さるべきものであつた。バリサイ人が律法に一種特

別の權威を措いて八釜敷守つて居たに反して、イエスは其形式に拘泥せずして、唯其精神のみを取れば足れりとした。儀禮に關するラビの典律の如きは、一生を以てするも學び得られない程にも多かつた。然るにイエスは「從順の心は儀禮に優れり」と簡單に解決を與へて居る。パリサイ人は供物の容器を甲の事に用ひた後には河水にて洗ふべしとか、乙の後には井水にて洗ふべし、或は又土器と鋼器とは各洗ふべき處を異にせざるべからずなど嚴しく云つて居る。然るにイエスは「まづ內なるものを潔めよ、きらば外も亦從つて潔まらん」と駁した。是等のことはパリサイ人には古今未聞の事であつた。彼等はイエスが食する前に其手を水に浸すや否や、水に浸すに際して其手を反覆上下するや否や、其折々の式によりて水に浸すこと或は肘に至り或は指の節に至り或は唯指端を潤すに止るなど、一々古例を守るや否やを確めむとした。然るに驚くべし。イエスも其弟子も全然其手を洗はなかつたのである。イスラエルの敬神家は安息日になると、必要の外一歩も身を動かすことを避けた。然るにイエスは野外に散策して快適を取るのみならず、彼れの弟子は手にて麥の穗をこいて食つた。安息日に麥の穗を落すは死罪に相當するのである。恁かる放縱無狀なる擧動は徹頭徹尾パリサイ人から抗議せられた所である。イエスが病人を癒したことすら、夫れが安息日に行はれたがために彼等は之を是認しなかつた。彼れが曾て會堂で憑鬼者に手を置いた所が、會堂の祭司は怒つて民衆に向ひ、「働くべき日は六日あるにあらずや、其間に來りて醫癒を受けよ、安息日に於てはなすべからず」と叫んだ。併しイエスは之を非難して云つた。「汝、僞善者どもよ、汝等は安息日にも其牛馬を飼はむがために廐より出して牽き行くにあらずや、さらばアブラハムの子にして此十八年間サタンに縛られたる此婦人は、安息日に其束縛より釋かるべからざるか」と。更に鋭く續けて云つた。「若し汝等の羊、安息に坑に陷らんに誰か之を捉へて扶け出さゝらんや、人は羊に優ること如何ばかりなるかを思へ」と。恁かる辯明は、行爲其ものよりも遙かに危險を招いた。

世に宗教家が自黨の教義の倒されむことを憂ふるより生ずる憎怨の念ほど恐ろしい

ものはない、一言として曲解せられざるなく、一行として邪推せられざるなく、偏へに之を陷るゝ材料を獲んとするものである。今やイエスの事業が益擴張せらるゝに及び最も危險を感じたパリサイ人の本據たるイエルサレムに於ては、彼に對する陰謀が企てられた。彼等は密使をカペルナウムに派遣し、親しくイエスの行動を監視せしめて其罪證を捉へんと骨折つた。又一方にはヘロデ王を使嗾して、其不義なる妻に依てヨハネの如き運命に彼れを陷れんと計つた。彼等の迅速なる活動は克くイエスの一舉手一投足にも通ぜしめた。然るにイエスの說敎が全然靈的であつて、毫も外部的破壞に現れなかつたがために、之に向つて何等政治的處置を施すの機會がなかつた。如何なるヘロデ黨も之に對して及物を用ゐるの餘地がなかつた。

斯くイエスに對するパリサイ人の陰謀が全く失敗したのに反し、イエスの雄辯が彼等の敎義に加へた打擊は深く其眞髓に切り込んだ。彼は常に根本原理から歩を進め、神の前には心の性情の外一も價値あるものなしと論難して彼等の精神を沒却せる虛禮を攻擊した。實際パリサイ人等が其律法の細目を極端まで遵行せんとした愚かさ加減は到底お話にならぬ。此パリサイ派の史家ヨセフ(Josephus)が、紀元四五年の饑饉に就いて語つて居る所に據ると、當時小麥一升の價が六十六錢、默示錄(アポカリプシス)に據ると七十錢の暴騰に達して、數百の人民は之がために餓死した。然るに神殿の中には踰越(すぎこし)の節(いはひ)(Passover)に供へた麥の量目は、少しも式例に違はずして八石に充ちた。且ヨセフは供物を俸ぐる祭司さへ飢を叫べるに拘はらず、一握りの穀粒も神殿內に失せなかつたのを誇り顏に書き誌して居るのでも察せられる。彼等は又總ゆる個々の禁戒を完了せんと汲々たる結果、神殿內に於ける己が德行を數へ、之を週間日錄に記入し、街頭に立つて高聲に祈り、會堂に入つては第一の上席を占め、人と語る時には師よ師よと呼ばれなければ安んじない。自分等が斷食せるを特に示さむがため殊更ら苦がい澁面をなし、其施の業々しき人をして往來に喇叭を鳴らさしめ、淸潔に注意するの甚だしき

一微蟲の嚥下をも恐れて、酒を飲む前にこれを濾過する。或は其上衣の偶々に着けたる總の長さを競うて、其信心の深きを誇らむとした。かかる笑ふべき虚飾はイエスのパリサイ主義駁擊の題目であつた。彼は「禍なる哉、僞善なる學者とパリサイの徒よ」といふ烈しき冒頭の下に、ドシドシ攻擊し彼等をして顏色なからしめた。パリサイ人は益怒つて直ちに彼れを殺さむと謀つたが、彼れの精神の猛烈なのと人氣の盛んなのとを見て、容易に手を下すことが出來なかつた。

イエスが特にパリサイ派に對して强硬なる反對を試みたのは、彼等が當代に重要な位置を占めたからである。彼は主として神國の障碍をなすものをパリサイ人に認めた。人民は全く其手中に左右せられて、結果の如何に成り行くかを顧みるの遑がない。彼等はモーゼの位に座して天國の鍵鑰を握つて居た。然も天國の門戸を人民の前に閉ざし、自分等も亦之に入ることをしない。徒らに繁文縟禮を以て人民を苦しめ、重荷を彼等に負はせながら、自らは指一つ搖かして之を扶けようともしない。一方に獨り意氣揚々として神の寵兒を氣取れる彼等を見、他方に孤兒の如く捨てられて迷へる民衆を見たイエスの憤慨は、彼等の瀆職を彈劾せずには居られなかつた。彼は終に敵の本陣イエルサレムに攻め寄せて、決戰を試みむと出で立つた。

第三節　決戰の上京

イエスは奮然起つてメシヤとして國都に乘り込むべく、踰越節（すぎこしのいはひ）の前、冬の終りの頃最後の旅行を試みた。先づベテサイダを發足して方向を北に取り、レバノンの高峯白雪を頂いて聳ゆるを眺めつゝ、ヨルダンの上流沼澤の地を横ぎつて、十二の弟子と倶に村より村へ旅行した。

彼れが始めて明かにメシヤの意味で人の子といふ語を用ゐたのは、彼等がカイザレヤ・フイリピに差し掛つた時であつた。彼は弟子に訊ねた。「衆人は我れを呼びて何人となすか」。「或人はエリヤと云ひ、或は古の預言者の一人なりと云ふ」。是に於てイ

エスは短刀直入「然らば汝等は我れを誰となすか」と切り込むで、氣遣はしげに弟子を見詰めた。答はペテロの唇から音樂と赤心に充ちて出た。「汝は活ける神の子クリストなり」と。然るにイエスは戒めて「我がことを誰にも告ぐる勿れ」と命じた。蓋し彼は決戰の門出にあつて、弟子等の覺悟をたゞし置く必要があつた。彼は危ぶみ乍らも彼等から正しき答を期待した。而して彼等が未だ通俗のメシヤの觀念より脱し得ず、世間的の勝利と光榮とをイエスに期待し、其迷夢より覺醒し得ないので民衆を誤つた希望に誘はむを恐れた。彼等が後に師の捕はれたるを見て失望落膽、ガリラヤに遁げ歸つたを思へば常に彼れが精神的孤獨の位置にあつたことが推測せられる。他の人々は什ふあらうと、弟子丈けは若しやと思つた彼は半ば失望した。彼は稍ムッとして彼等に他言を禁じたのである。

從來己れを暗殺せむとしたパリサイ人やヘロデ王の陰謀を豫知し、細心なる注意を拂つて之を避けて來たイエスが、今や生死の岐るゝ所此行にありとは自らも心中に蔽ふこと能はず、死期に處する覺悟は充分に具へて居た。併し彼は死なむため十字架に懸けられむために上京したのではない。吾人は信仰に對して彼れの死が何を意味するかといふ問題と、彼れ自身が死に對して如何なる態度を取つたか、夫れを己が活動の目的としたかといふ問題とを混同してはならぬ。吾人の玆に必要なるは第二の歴史的問題である。彼は苦戰を豫期した。或は戰死の免る可らざらむを感じた。有力家の反對、民衆の去就定まらぬ態度を見ながら、猶も太平を謳歌する程には彼は愚ではなかつた。併し彼れが又死に外の運命の不可能を知り、死其ものを目的としたとは餘りに不自然である。恰も戰場に出で立つ勇士の如くに彼は死を覺悟したのである。其覺悟は生還の希望を含んだ覺悟である。而して戰死は必ずしも敗北に非ざるを同時に知つた。苦難及び死の近づけるを感じ乍らも、己が受けた使命に疑を抱かなかつた。

彼は己れがメシヤたることを弟子に明かすと同時に、人の子は多く苦みを受け長老祭司及び學者に斥けられて遂には殺さるべきを語り初めた。「我れに受くべきのバプ

テスマあり、その成し遂げられむまでは吾が痛み如何ばかりぞや」。ヨハネの處刑は既に彼れの死を多少豫告せるものであつた。「世はヨハネを知らず、唯だ意のまゝに之を行ひぬ、人の子も亦かくの如く彼等の手に苦しまむ」。併し彼は其運命の跡を察するに、ヨハネを地下に喚び起す必要を認めなかつた。既に人民に排斥しながらメシヤの冠を尙其手中に獲んとする彼れには、此事業の結果が何を齎すべきか說明するには餘りに明かであつた。況んや彼が屢預言者埋骨の地と名づけたイエルサレムに於て演せんとするに於ておや。彼れの心の眼に映じたものは最早ローマ人の十字架ではなかつた。洗禮者の死の悲劇でもなかつた。人民の手に依つて遂げらるべき最後であつた。彼は何故メシヤが其生命を失はねばならぬか、との弟子の疑問に對して、ユダヤ人の狂暴へロデの殘忍を以て答へず、「多くの人の贖として其生命を與へむがためなり」との言を以てした。彼れにして死を避けたならば、王國は地上に建設せられざるに早くも荒廢に歸すべく、彼れにして其恐るゝバプテスマを甘受したならば、其血は新盟約のセメントたるに足らむ。「汝等之を飲め、こは我が新盟約の血にして多くの人のために流す所のものなり」。彼は屢舊約書にあらはれたる犧牲の觀念を以て疑問を解かんとした。

カイザリア・フイリピに於て、弟子等に重大なる問題を說明したる後、イエスはヘロデ領のものをして其所在を知らしめざらむがため人通り稀れなる路を選んで異教者の土地を横ぎつた。此最後の旅行中イエスは始終死の念慮に滿されて居た。然るにこれに從つた十二人の弟子は、誰が新王國に第一位を占むるかなど論諍しつゝ却つて喜び勇んで居た。彼等の王國に對する誤解は遂に結んで解かれなかつたのである。恁くて彼等が徐ろにカペルナウムに達してペテロの家に入つた時に、イエスは「汝等途すがら何を諍ひしや」と問ふたが、默して答ふるものはなかつた。聽て座に着いてから側に居た子供を抱きながら、「汝等此の嬰兒の如くなるに非ざれば天國に入る能はず」と、彼は戒めた。

ガリラヤの預言者イエルサレムの祭節に上らむとすとの警報は、軍國の動員令の如く民衆の耳に響いた。すは時こそ來りたれと、群衆は忽ち彼れの後ろに加はつた。陰曆三月ニサン（Nisan）の初め、參拜のものどもは追々に馳せ集り、第三日目には總勢狂せむ許りに祭節さして出立した。ガリラヤの大衆は捷路をサマリヤに取つて山路を進み、イエスは弟子等と倶にヨルダンの對岸に向つた。綠蒼々たるギレアテの連山を過ぎ水滔々たるヤボクの川流を渡る。遙かにネボー山はモーゼの墓の在る處、近くにアタラス山はヨハネが屍を埋むる處一種沈鬱莊嚴の氣に襲はれつゝ、イエスは駭き怖るゝ弟子に先き立つて進んだ。一行がヨルダン河を渡つてユダヤに入り、第一の村に達したのは第三日目の薄暮であつた。忽ち婦人の一隊は彼れを認めて歡呼の聲を上げ、其祝福を請はむと愛兒を携へて詰め掛けた。パリサイ人の妨害は徒らに群衆の數を增す方便となつた。

恁くてエリコに達した時には、其住民のナザレの此新預言者を見むと樹上に攀づるものさへあつた。此の地よりイエルサレムに上る途中の谷は岩石崎嶇たる坂路であつて、無花果橄欖櫻櫻櫚等げに美しく生ひ茂り、目ざす都は西の方モリヤ山の麓に甍を聳かして居る。道は直ちに都の方に急下し、夫れよりゲツセマネに通じ、シオンの都は眼前に展開された。ガリラヤ男兒の熱血は如何ばかり狂熱に燃えたらう。彼等は一齊に歡喜の叫を揚げ、櫻櫚其他の灌木を折り取つては其枝を打ち振り、其綠の葉を投げ布き、果ては其上衣まで脫いで路の上に擴げた。都の兒女さへ參拜のガリラヤ人に聲を合はせて、恰も前途の幸運を祝福するものゝやうであつた。イエスがガリラヤ人を率ゐて此莊嚴なる入都をするに及んでは、說敎は最早其目的を達せしむる過程ではなかつた。祝節の時期は之に對して餘りに短かい。勢威を弄して居るパリサイ派の心は餘りに頑迷である。俄にメシヤの旗を押し樹てゝ彼等の不意を襲ひ、民衆の歡呼に擁せられて反抗の嘶やきを壓倒すべきである。

國都入京の第一日には、民衆は彼れを見んとて來り迎へたのみであつた。イエスは唯だ神殿の中を逍遙するに止めた。神殿は東門より入れば外庭の前廊に出で、之に接して直ちに大廣堂がある。踰越節も近づいたので、先着の參拜者は既に都に入つて何處も彼處も忙しさうである。外廊の鳩賣る店には婦人來りて犧牲の鳩を買ひ、外國より來た者は其錢貨をユダヤの貨幣に替へ、繫がれたる家畜は呻めき叫んで喧しい。十三箇の賽錢箱には旅人が今兩替した許りの錢を投げる音が絶えない。斯かる光景を傷ましく眺めつゝ、イエスは其夕は寄寓を近くの村に求めむとベタニヤに退いた。富める者の外は凡て斯くする習はしであつたのだ。癩病人シモンの一家は歡び迎へて、深切に寓居を彼れに供した。

イエスは最早ガリラヤに於ける穩和な口吻を取らなかつた。祭司及び學者等に對して猛烈なる攻勢を取つた。屠所に牽かるゝ小羊ではなくてユダの獅子となつた。祭節に集まれる民衆の去就を一擧に決せしむる必要があつたからである。故に第二日神殿の前廊で鳩を賣る者の舖、兩替する者の臺の周圍に集つて喧しく立ち騷ぐ民衆を見たイエスは、是等の臺を覆へして商人を逐ひ出し、其の器具を破壞して叫んだ。「我が家は祈禱の家と稱へらるべしと錄るされしに非ずや、然るに汝等は之を盜賊の巢となせり」。愕き騷ぐ民衆に向つて猶も彼は言葉を續けた。「我れ此神殿を毀ち三日にして復た之を建てむ」と。是れ敵に對する宣戰の布告であつた。民衆は彼れを圍んで群がつて居たので、神殿の役人も彼れに近づくことが出來ない。然も兒女等は「ダビデの裔よ」と歡呼したので、祭司は憤怒の眼をイエスに注ぎつゝ此喧騷を制せんことを彼れに求めしに、却つて「嬰兒の口に讃美を唱へしめたりと誌るされたるを汝等未だ讀まざる」かと斥けられた。

第八章　受難

第一節　難問と就縛

イエスの挑戰的態度は敵を聯合せしめた。祭司長を初め貴族黨のサドカイも今や彼れの敵となつた。貴族黨も平民黨も、サドカイもパリサイも、古き敵も、新しき敵も舊怨を打ち忘れて聯合し、此危險なる侵入者を無きものにせむと計つた。

さて福音書の記事は、全く東洋的の光景に滿たされて居る。其後イエスは一語をも發せずして或はソロモンの廻廊に現れ、或は賽錢箱の側に立ち、人々も亦彼れに威伏せられ、メシヤの大問題を誠實に冥想しつゝ默坐環視するのみである。只其の間に敵の間諜が斷えず現れて、威儀ゐかめしく難問を提出するに、人々は片唾を呑むでイエスの解答に耳を傾ける。夫れが終ると又元の沈默に歸る。吾人は暫く是等の記事を辿

らう。

敵は手を下してイエスを捕へむと企てたが、民衆の態度を恐れて果さず。茲に自ら預言者殺戮の汚名を負はずして、ローマ人の手を借りて彼れを除かむと陰謀を巡らした。先づ彼等の特派した間諜は往つて難題を持ち掛け、イエスを罪に導かむと苦心した。

眞つさきに攻擊を試みむと現れ出たのは、長老と祭司とであつた。彼等はイエスを捉へて雙關(ダレンマ)の内に追究せむと企て、質問の第一矢を放つた。「汝、何の權威をもて此等のことをなすや」。イエスは之に答へず、却つて「ヨハネの洗禮は天より出でしか、人より出でしか」との反問を以て報いた。敵は忽ち躊躇した。若しヨハネの事業を是認せば、從つてイエスの行爲をも認めねばならぬ。若し又其天職を否認せば、民衆の怒を招く恐れがある。彼等は怯懦なる無言の裡に「知らず」と遁竄して了つた。

前の敗北に懲りず次いで矢表に立つたは、パリサイ黨とヘロデ黨の者であつた。彼等

は「貢税をローマ皇帝に納むるの可否如何」と二つの坑をイエスの前に堀つた。右するも左するも死の口は開いて彼れを待つた。蓋しローマ皇帝はイスラエルの仇敵である。傲然として神の選民の頭に踵を加へ、鷲章の旗はイエルサレムの神殿に高く飜つて居る。アブラハムの後裔たる者にして此專制者を君として仰ぐ可きか。イエスが若し然り納税すべしと答ふれば、國民の指導者たるの機會を逸すべく、若し又否と云へばローマの官吏は直ちに彼れを捕縛して處刑するであらう。此方には群衆の眼は輝いた。彼方にはヘロデの官吏が腕に唾して居る。併しイエスは泰然として先づ彼等にデナリ（Denari）の一片を出さしめた。「僞善者よ、此貨幣の面の肖像は誰ぞ」。「ローマ皇帝の像」と追窮者は澁々に答へた。貴き獲物は其手より去らむとした。「さらば皇帝の物は皇帝に納めよ」。恁く法律と秩序には神權あるを示した後、イエスは一歩を進めて敎訓と叱責を兼ねて、「神の物は神に納めよ」と戒諭した。敬神なる愛國者も憤るを得ず、其敵も罪すべき理由を捉へ得ない。攻擊は出でたる者に返つた。

サドカイ黨の貴族は己が同盟者たるパリサイ黨のなすなき見て、今や自ら其力を驗せむと前に出た。「七人の兄弟に相次いで婚したる婦人は復活すれば誰の妻たるべきや」。是れ必ずしも有り得ざる場合でない、此質問を案出した彼等は其妙策なるを自ら得意とした。併し彼等も亦敗北した。イエスは其問に根本の誤謬あるを示した。「汝等は聖書をも神の力をも知らざるが故に斯かる誤謬に陷れり。夫れ復活したる者は娶らず、又嫁かず、天にある神の使の如し」と。而して彼は來世を信せざるサドカイ人の謬見を排した。

事の始終を傍より觀て居た一人の法敎師は他の交々敗れ退くを見て、彼等は律法に暗き故に脆くも敗を取るのである、我れには彼等の知らざる縱横の辯難法あり、イデ試みむと進み出た。彼れの鋭き鋒は向けられた。「律法の中にて何づれが重大なる誡なりや」。雷の如き答は立ち所に彼れを屏息せしめた。「汝心を盡し意を盡し主なる汝の神を愛すべし、是れ第一にして大なる誡なり。第二も亦之に同じく己れの如く汝

の隣人を愛すべし」と。爾後また出でゝ質問を試むる者はなかつた。

是に於てイエスは最後の打擊を加へて彼等を壓伏し、復た文字上の論諍を起すなからしめむと、乃ちメシヤに關する彼等の俗的希望を破壞した。パリサイ黨攻擊の演說は兩刃の劒の如くラビの胸裡を貫いた。彼れが一生を通じて其の最も鋭鋒を現したのは此時であつた。彼等がイエスの前に立つや全く其暗譏の標的となり、衆人諠笑の玩弄物となつた。彼等が謹嚴なる法服を着けて神殿に入り來れば、イエスは其長くして、其護符の大なるを嘲り、彼等が外國の改宗者を携へて揚々祭節に導き來れば、彼は、其信仰の子を罵つて彼等に倍したる地獄の子と稱し、彼等の銀貨が瑯玕の響をなして賽錢箱に落つれば、彼は却て二厘のレプタを投じたる寡婦を賞揚した。次いで彼は王國の將來及び來らむとする審判を說いて己が禍難の罪を民の導者に歸し、二年前洗禮者が開口劈頭に唱へたにも優る威嚴を以て彼等を叱咤した。「我れ汝等に告げむ、主の名によりて來る我れを見ることなかるべし」と。此言を遺して彼は踰越館の三日前、遂に神殿を出て弟子と共に東の殿階をキドロンの方に下つた。此夕べ、彼は橄欖山の頂に坐して莊嚴を極めたる大都を眼下に瞰みつゝ、詳に國民の將來を語つた。大理石の大厦高樓そゝり立てるモリヤの丘は雪を戴ける岩石の如く、屋上の金柱は旭に輝きて赫灼たる光、目を眩す許りである。併しイエスの弟子に語つたのは皆此都府に關する熱誠哀歎の辭であつた。暗雲が彼れの運命の上に襲來せる如く、イエルサレムの上にも急飛しつゝある。彼れの眼は其國民が讐者に導かれて取りたる徑路の必然に落ち行くべき光を見た。彼れの心に映じたものは、頽れたる都府の灰燼の間に荒凉たる高塔のみ聳えて、現代國民の子孫が空しく荒廢せる國土を眺むるの光景であつた。

踰越の祭節は愈近づいた。ヘロデ（Herod）は祭の期間其中央に出でむと、テベリアより上京してアスモネヤ人の有たりし古城に其寓を定めた。又ローマの總督ピラト（Pilate）も親ら祭節中公衆の擧動を監視せむがため、カイザリヤより來つて莊嚴なる王宮シオン城に居を占めた。其年の祭司長はカヤバ（Caiaphas）と呼ばれたヨセフ

であつた。尤もイエス審判の衝に當つたのは彼れではなくてアンナスであつた。アンナス（Annas）はサドカイ黨諸家中最も材幹のあつた家長であつて、後見人としてカヤパと共に事を執つて居た。此アンナス家は、當時イエルサレムに於て最も勢力を有し、祭政の事に關しては其協賛なくては何事も出來なかつた。イエスに死刑を宣告したのも彼れである。又後年イエスの兄弟ヤコブも亦アンナス家のために迫害を蒙つた。彼は卓越せる才幹を有し、衆人を籠絡してイエスの行動に鋭き監視の眼光を向けた。彼は民衆の意向が豫測すべからざる情勢より打算し、自分の子の勸告を容れて未だ人民の意向の決せざるに先立ち、穩かにイエスを除き去らむと計つた。而して祭の主日即ちニサンの十五日にイエスを公衆の前に現さしめないとの此計畫は、恰もよし意外の助をイエス十二弟子の一人より得た。彼は其前に出て、我れに銀三十を與ふれば、「其師が祭の前夜を過ごさむとせる場所を示すべし」と申し出たのである。

此内應者イスカリオテのユダ（Judah Iscariot）が變心者の動機を知るには福音書の記事は甚だ不充分である。又彼れの性格と彼れが選拔せられて使徒の一人に如はつたことも、共に解釋に苦しむ問題である。

ユダは他の使徒が何れもガリラヤ生れなるに反し、ユダヤ本土の者であつた。從つて、彼は現世的王國を望み現世の報償を欲すること他の使徒よりも熾であつて、此一念は彼れを驅りてイエスの門下に馳せ加はらしめる有力なる動機であつたらう。又彼は天質に感情的の要素多く、イエスの敎を聽いて心に感じ働かされて來た所もあらう。そしてイエスは又使徒選拔の時には、早く天國の敎の眞理を吸收し、之を人に敎ふるに適せりと思はれたものを採用したのであらう。從つてユダが之より先ヨハネに師事して既に多少の進境ありしが故に、其の選に入つたことゝ思はれる。彼はイエスの奇跡を非常に喜んだ。初めは事凡て己が最も望む所に赴くが如く思つた。弟子の中でも彼は特に選ばれて同志の財囊を保管する任を託せられた。今は瑣細なる財も久しからずして大に增殖するの日來らむと期待したのは疑ふべくもない。當初の事盡く順境で

あつて、彼自身と雖も反逆者にまでならうとは思はなかつたらう。彼れの胸中に初めて毒心の萠した事は、想ふにイエスが生命の麵包のことを說敎し、之がために一度び決心して歸服した者を失望して去らしめ、十二使徒にさへ危惧の念を抱かしめた其時であつたらう。イエスが其死を預言した時、他の弟子の潔白な心には解し難きも、ユダは早くも己が現世的希望の空しくなるを悟り、失望の念は彼れを狂せしめ、彼れの希望を欺きたる師に對し、復讐を加へむと決心せしめたのであらう。尤も他の弟子とても從來信ぜし所と師の敎とを調和せしむること能はず、胸中に苦戰したりしならむも、幸にして師を愛する情誼の斷ち難きものあつたがために、此の苦悶に勝つことが出來たのである。然るに此眞情を缺いたユダは敗を取つたのである。彼れの失墜を專ら金錢の慾に歸するは未だ盡して居ない。彼は一にはイエスが己れの希望を遂げしめざるを憤り、一には自己の心底を觀破されたるを怨むだのである。そして他の弟子を嫉むで、常に同志の中で孤立して居た。秘密なる罪念は人を孤立せしむる。初めは只一の思想の兆であつたのが漸次熟して行つて、最後に此暗き決心を實行するに至つたのである。

ニサンの十四日、イエスは最後の晩餐を弟子と俱にした。主人が特に備へた廣間には、食卓及び床几を供へ、一人の弟子小羊を殺すの任に當つた。夕べになつてイエスは弟子と共に設けの席に着き、儀式作法凡て法の如く嚴重に守られた。先づ手を洗ひ淨めて祈禱をなし、一家の主人杯を擧げて祝福の詞を述ぶ。「オ、主なる我等の神、世界の王、葡萄の實を造りしものは頌むべき哉」。述べ終つて杯は廻された。ユダも敢て臆する色なく席に列なり、イエスが彼れの足を洗ふに委した。イエスは斯くまで心の鈍れる僞善者を見るに堪へず、「汝等盡くは潔き者にあらず」と云ひ、猶もユダの同席にあるを心苦しく思つて、「汝等の一人我れを賣るべし」と宣べて、一撮みの食物をユダに與へた。他の弟子は之をも親愛の印しなりと思つた。福音書には「此の食物を受けし時サタン彼れに入れり」と記されてある。イエスは最早堪へ兼ねて、

「汝のなさんと欲することは速になせ」と云つた。他の弟子は解し兼ねたがユダは之を解して出て行つた。時既に夜であつて、頭上の空暗く罪念に充つるユダが心中には彌や暗き夜やあつたことだらう。後にはイエスと弟子とのみ。物悲しく力なく情切なる此一夜にイエスの美しき言葉は遺された。食事の果てむとする時、イエスは一片の麵包を取つて祝して之を割き、弟子の間に頒ちて云つた。「取りて食へ、之は汝等のために與ふる我が肉體なり、我れを記念せむために之をなせ」と。又杯を取り之を祝し、「汝等皆之より飲め、之は我が新約の血にして汝等のために流す所なり、飲む毎に我れを記念せよ」と云つて與へた。然も自らは飲まずして彼は言葉を續けた。「誠に我れ汝等に告げむ、神の國に於て新に之を飲まむ日までは今より後葡萄の酒を飲まじ」と。怎くて大ハレルヤ（Hallelujah）を歌つて式は了つた。「オ、神に感謝せよ」彼は常に善にして其仁慈は永く渝ることなし」とは、イエスが最後の晩餐を閉づるに當り、弟子と倶に唱へた詩の句であつた。歌ひ終つて彼等の散開せむとするや、イエス

見て来た様ふうそを はづかしくよよ書いちゃのだ、

スは弟子に武器のことを問ふた。「劍を有たぬ者は其上衣を賣りて之を買へ」と。弟子が二振りの劍を示したのを見て、彼は「足れり」と點頭いた。「暗殺を防がむためであつた。」いゝが城にせい・馬併せ郎、衣を賣って刀を買へる譬に きん張せよとの事ぶんだ、

夫れよりイエスは、此大祭の前夜をベタニヤに過ごさず、橄欖山の北方なる山側に過ごさむとゲッセマネ（Gethssemane）に往つた。此處は彼れが弟子と倶に祈禱するを常とした處である。祈禱の聖壇は此の夕べ最も鋭き苦悶懊惱の場所となつた。今も其跡を標して數株の橄欖樹が昔の樹に繼いで植ゑられて居る。福音書の記者は此の場の苦惱悲哀を寫し出すべき適當なる形容に最も力を注いで居る。イエスは涙を流し泣いて祈つた。其は身體の苦痛よりは寧ろ精神の苦痛であつた。彼は弟子が近くに在りと知るを喜びながらも、見らるゝまで近く在らしむるに堪へず、「我れ彼處に行きて祈る間此處に居れ」と云つて獨り祈つた。苦悶は彌々烈しくなり、殆んど死なむ許りに感ぜられ、終に天父の愛、神の全能に訴へた。「父よ汝は凡ての事能はざるなし」。祈

り終つて死の苦酸は去つた。彼はゲッセマネから起つた。抵抗は畢つた。

今やユダの謀を行ふべき時となつた。高等法院（Sanhedrin）の間者及び一隊の捕卒の先きに立ち、「我が接吻する者は夫れなり、之を捕へよ」と、臆する念を脱し盡したユダは、ツカツカと進み寄りさまイエスに接吻した。斯かる刹那にもイエスは猶ほ彼れを見棄てなかつた。「友よ、何のために來るや」と、併しイエスの心盡しも仇であつた。彼は既に賣られたる身であつた。ユダは既に已に賄賂を受けて居つたのである。

併しながら又ユダの受けた賂金は火の如く彼れの肉を食つた。彼は遂に金を返さむと祭司長の許に往つた。併し祭司等は「我等何んぞ與からむや」と斥けた。惜むべし。此時ユダにして祭司に往かずしてイエスに行き、罪を謝したらんには如何に異なる結果を生じたらう。既に身を誤れる彼は慰籍を得る能はず、其銀錢を神殿の戸口に投げ入れ、去つて自ら縊りぬ。

第二節　審問と磔刑

弟子等は狼狽して四方に散亂し、イエスは捕卒に縛せられ眠り覺めぬ市街を過ぎて祭司長の官邸に護送せられた。彼等は一刻の猶豫も由々敷大事を惹き起さむを恐れ、恰も祭日であつてユダヤの規定に抵觸するをも顧みず裁判を開始した。

時は木曜日の夜、先づイエスはアンナスの前に曳き出された。アンナスは二十年前に職を罷められたのであるが、高等法院に於ては依然勢力を揮つて居た。現任の祭司長カヤパも彼れの女婿であつて、其一門の五人の子も盡く諸員として法廷に列して居た。今やアンナスは輕侮と嫌悪とを以てイエスに對し、最初より死罪に當るべき白狀を強ひ取らむと力めた。ユダヤの法律によれば斯かる裁判は全然不法の處置である。被告は全法院の前に立つに先んじ一個人より審問を受くべき理由なく、且つ法律上一人の裁判官一人の證人にては法廷は成立しないのである。故にイエスは「我は未だ曾

て祕密に語りしことなし我如何に語りしかは聽ける者に問へ」と不法なる訊問を拒絶した。アンナス郎黨の一人は「汝祭司長に向つて斯かる答をなすか」と云つて彼れの面を打つた。併しイエスは從容として怒ることなく只正當なる權利を主張した。アンナスも亦如何ともする能はず、彼れをカヤバに送つた。

カヤバは僞りの證人を得ずんばイエスを誣ゆる道なきを悟つた。併し之も不法行爲である。先づ罪人を定めて後告訴人を造るは背法である。且又通常の民事に於ても裁判は晝に限られ、重き刑事にても日光ある間に結了せらるゝを要したるに、夜中此裁判を始めたるは違法である。さて法廷に於ける證人の言は一致しなかつた。併しイエスは彼等の互に齟齬するに任せた。證人は狂せむ許りに躁立つたが、彼は默して一語をも發せず、坦然として自ら持した。カヤバは且つ怒り、且つ畏れ、己を忘れて席を起ち堂の中央に乘り出して叫んだ。「汝答ふる言葉なきか、此人々の立つる證據は如何に」と。沈默は依然破られなかつた。彼は再び叫んだ。「汝はクリスト、神の子なるか、我れ汝を活ける神に誓はせて之を告げしめむ」と。是れ列座の人々の待てる訊問であつた。イエスの口は始めて開かれた。彼れの答は大膽であつた。「然り我は夫れなり、且つ我れ汝等に告げむ、今より後、人の子、大權の右に坐し天の雲に乘りて來るを汝等見るべし」。之を聽くや人皆其の上衣を裂いた。蓋しイスラエルの風習として神を瀆す言葉を聞く時は、直ちに衣を裂くを常としたのである。祭司長は叫んだ。「是れ神を瀆す言葉なり、何んぞ別に證言を求めむや」と。イエスの運命は茲に決した。

正式の判決は夜明けて後、諸員の揃ひたる席にて下さることになつて居た。時は正に夜半過ぎて春寒肌を刺すに、兵卒は罵りつゝイエスを監房に曳いて往つた。此處を出づる時、ペテロが誓つてイエスを知らずと云へるを彼は聞いた。恐るべき侮辱は彼れに加へられた。夜明け初めて再び高等法院の會議は開かれたが、唯前夜の決議を確むるに過ぎなかつた。夫れより彼はローマ總督ピラトの法廷に渡された。

此の朝ピラトは常の如く政務を見むとて公廳に出て、ローマの國神の祭壇を設けたる法廷に坐して居た。折りしもユダヤ人等訴訟ありとて來りたるも、聖節の週なればこの異邦人の政廳に這入らない。でピラトは親ら外に出て物憂く、「汝等如何なる訟を以て我れに訴ふるや」と問ふた。「彼れ若し惡を爲せる者にあらずば汝に渡さじ」と、彼等は無禮なる答を報いた。ピラトは己れを審判官たらしめず、處刑人たらしめむとするユダヤ人の術に乘らず、輕侮の語氣を負んで云つた。「汝等之を取り、汝等の法律に隨ひて審判せよ」。彼はユダヤ人をして自ら死罪に處する權能なきことを澁々白狀せしめた。イエスはユダヤ人の罰によつて死するのでなく、ローマの慘刑たる十字架に死ぬべきであつたのだ。故に彼等には神を瀆したりとの罪狀も、ピラトの前には無効であつた。そこで彼等は別にイエスが國民を蠱惑してローマ皇帝に貢租を納むるを禁じ、自らクリストなり王なりと號したと訴へた。

ピラトはイエスを受取り、內に入つて鞫問した。「汝はユダヤの王なるか」と。蓋し彼はイエスに接して一一には憐れみ怪しみ、一には罪人の氣高きに感じて覺えず尊敬の念を催し、顏色憔悴して力なげなる汝が果してユダヤ人の王なるかと問ふたのである。イエスは反問して、「汝この事をいふは自らいふか、又我れにつきて人の言ひしによるか」と質した。「我はユダヤ人にあらず、汝の國民と祭司長汝を我れに付せり、汝何をなせしや」。イエスは、自己の稱ふる王の現世的王權を主張するものにあらざを說明したる後、「我は王なり、我は眞理につきて證せむために來れり」と答へた。ピラトは叫んだ。「眞理、眞理とは如何なるものぞ」。此一語の裡には短氣、嘲笑、失望の意が併せ含まれた。彼は此罪人がローマの帝權を犯す程の者ではない、唯だ罪なき夢想者に過ぎないと思つた。ピラトは外に出て、群がるユダヤ人に向つて「我れ彼れに罪科あるを見ず」と告げた。群衆の激怒は破裂した。我が祭司長の判決を此一異邦人のために空文とされて好かるべきと、彼等はイエスがガリラヤより始めて全國民を惑はしたるを怒號した。ピラトはガリラヤ縣分封の王ヘロデが、當時恰も

イエルサレムに在つたを幸ひにイエスを其許に送つた。

曾て洗禮者ヨハネを殺したる暴君の前に出でむため、イエスは又もや街上を曳かれて往つた。ヘロデは舊惡を懺悔する色毫もなく、イエスに奇跡を行はしめて一場の娯樂に供せむとした。然るにイエスは沈默を守つて之に對したので、彼は郎黨等と倶に總ゆる輕蔑侮辱を以てイエスを遇したる末、再び彼れをピラトの法廷に送り還した。蓋し國賊を以て訴へられた罪人は、ローマ皇帝の法廷にて審問さるゝは當然であつたからである。

「イエスを如何にすべきぞ」とのピラトの言葉に應じて、狂へる聲は忽ち叫んだ。「十字架に運べ、十字架に運べ」。彼等はイエスに冠らしむるに棘の冠を以てし、紫の衣を着せ、手には笏に擬したる蘆を持たしめ嘲弄して云つた。「ユダヤ人の王よ、安かれ」と。玆に至るもピラトは猶ほ罪なきイエスを救はんと彼れを引き出し、其の傷ましき華服と侮辱を加へられたる儘にて之を示しつゝ、「此人を見よ」といつたが

彼等は堅く執つて動かなかつた。「我等に法律あり、其法律に從へば彼は死ぬべきものなり、彼自らを神の子となせばなり」。ピラトは神の子なる一語に矍然として驚き再びイエスを内に携へ入つて問ふた。「汝何處より來りしや」。イエスが默せるより怺へ兼ねたる彼は傲然として叫んだ。「汝我れに答へざるか、我れ汝を十字架につくる權威あり、又汝を赦す權威あり、此事を知らざるか」。イエスは裁判官を審問する口吻を以て答へた。「汝上より權威を賜ふずば我れに向ひて權威あることなし、此の故に我れを汝に渡したる者罪最も大なり」と、ピラトは今一度彼れを赦さむと公衆に曳き出し、「汝等の王を見よ」と試みた。此時人心は既に激し、然も論議に倦むだ。ピラトが「我れ汝等の王を十字架につくべけんや」といふや、群衆は一齊に「皇帝の外我等に王なし、若し此者を赦さば汝は皇帝に忠ならずと叫んだ。此に至つてピラトも答ふるの辭なく、人の前に手を洗つて云つた。「我れ此義人の血に罪なし、汝等自ら之に當れ」。彼等は恐るべき大逆の重荷を引き受けて、「其血は我等と我等の子孫

に係るべし」といつた。ピラトはイエスを十字架につくるを許して衆人に與へた。

以上述べ來つた審問に關する福音書の記事は、其まゝを信ずべきでないかも知れぬ。併しイエスの弟子等が誰も其場に臨まなかつたといふ理由で、之を否認してはならない。イエスを葬つたアリマチヤのヨセフ（Joseph of Arimathaea）は高等法院の一員であつた。彼れの口から其場の光景が弟子等の間に洩れなかつたとは保證が出來ぬ。吾人は此記事を疑ふべき有力なる理由を持たぬ。むしろ夫れは大體に於て其精神を傳へたものと讀むで宜いと思ふ。次に注意すべきはイエスの罪名である。ローマの總督ピラトは十字架の上に「ユダヤ人の王」と書かしめた。彼はメシヤを政治的に解し、イエスをば人民を煽動し暴徒を起してユダヤ人の獨立を計る危險なる反逆人と考へたのである。

さても兵卒等はイエスに十字架を擔はしイエルサレムを出でゝ、カルワリオなる刑場さして曳いて往つた。イエスは往く往く十字架の重みに得堪へず屢々仆れたので兵

卒は折柄通り掛つたシモンなる者に強ひて助け擔はしめた。途中ベロニカ（Veronica）といふ婦人が群衆の中から走り出てイエスに帛を献げたので、彼は自らの面を拭ひ面影を帛に寫して與へた。此時二人の盜賊も死刑に處せらるゝため刑場に曳き往かれた。聽てカルワリオ山に到着するや、沒藥と苦膽とを混じた酒を飲ましめ苦痛の感じを輕減せしめむとしたが、イエスは自ら苦を忍ぶことを覺悟して居たので、之を嘗めた丈けで飲まなかつた。かくて兵卒はイエスの衣を剝ぎ取つて裸體にした。其の時衣は創に附着して居て痛み甚しく、頭上の冠も障なればとて取除けるを、復もや元の如くに押し冠らしめ、午後三時頃遂に之を十字架に釘付けた。其時には手足をえぐつて釘を差し込み、金槌にて强く打ち附け、先づ右の手を打ち附けた時左の手が縮むだので、兵卒は無情にも手足に繩をかけ力に任せて引き伸し、釘を以て一聲高く打ち附けた。疵口からは流血淋漓として目も當てられない光景であつた。此時イエスの左右に二人の盜賊も磔刑に處せられたといへば、イエスは全く罪逆人の中に加へられたのである。

尙十字架の下にはイエスの母マリヤ及び其妹クレオパの妻マリヤと、マグダレナのマリヤ並に弟子ヨハネ等が留まつて太く悲歎に沈めりといふ。是等の記事は勿論後人の附加したもので一々信ずべきでない。只磔刑の方法は多少ローマ史家の記事と符合して居るやうである。

臨終の言葉は人の常に熱心なる注意を以て聽く所である。イエスが臨終に際して發せりと傳ふる十字架上の七言は、福音書の記者によつて一言一句を洩らさじと勉むる如く、特に筆を留めて詳細に叙述されて居る。以下逐次簡單に紹介しよう。

一、「父よ彼等を赦し給へ、そは爲す所を知らざればなり」。之れ第一の言葉であつた。一夜死ぬ許りの苦悶をなしたる後、六回の審問を受け、ローマ人の鞭撻と侮辱を蒙れる彼が、今や十字架の上にあつて鐵の釘が掌を貫ける時に發した言である。是等の苦痛に壓せられながらも自己の苦惱を思ふことなくして、却て己れを殺すもの丶罪を思ひ、彼等のために祈禱の唇は開かれたのである。

二、イエスと同時に十字架に懸けられて居た一人の賊は、頻りに彼れを罵つて居たが、他の一人は其無禮を責め、罪なき主のために明しを立て丶、「我等は爲せしことの報果を受くるなれど此人は善からぬ事を爲さゞりき」と辯じ、更に祈つた。「主よ汝其國に來らむ時我れを覺え給へ」と、イエスの第二の言は茲に發せられた。「汝、今日我れと偕に樂園に在るべし」と。

三、次にイエスは親しき者に向つて語つた。「女よ、これ汝の子なり、子よ、これ汝の母なり」と。彼は十字架の上から眺めて遠き周圍より次第に身邊に及び、十字架の傍に其母と愛する弟子の立てるを見て、之より後二人の相愛し相寄ることを薦めたのである。

四、全地は今や暗憺たる色にて覆はれた。彼は神の面前より閉ぢ出だされたるを感じ、終に一聲高く叫んだ。「我が神、我が神何んぞ我れを棄て給ひしや」と、然れども之は失望の聲ではなかつた。堪へ難き惱みを神に訴へ、其助を呼びつ丶希望と信賴

との告白に了つた詩編第二十二の詩人の祈を、其まゝ己が祈として慰めを求めたのである。

五、口に何物をも味はざること二十餘時間に及べる彼は、精神の哀訴を神に捧げたる後、今や肉體の苦しみを訴へ男らしく叫んだ。「我れ渴く」と。王位の階段に上らむとしながらも、甘んじて一杯の水を乞ふたのである。

六、彼れの靈魂が、長い間の苦樂の器たりし肉體と別るゝまでには、猶須臾の時を餘した。然も此時苦惱は既に去つて勝利報賞の盛んなる念は復た來つた。過去を回顧して最早この世に爲さゞることなきを知つて、「我が事畢りぬ」と云つた。

七、彼れが潔白なる靈魂を、天父の搖かざる疲れざる手に託するは、最も祝福すべきことであつた。最後の言は凱歌の如くに轟いた。「父よ、我が靈魂を汝の手に託ぬ」と。

恁くて此偉大なる生命は其終焉を告げた。されど此終焉は人類に於ける更に高き生命の原始たらざるを得なかつた。蓋しイエスは初めより死の動かす可らざる運命を知つて居た。同時に其死は却て生に變じ、失敗に了りたる如く見ゆる己が事業は、必ず勝利を得べきを信じた。彼は勝利を信じて十字架に懸けられたのである。彼れにして若し敵に讓歩したり又は卑怯なる振舞に出でたなら十字架は決して新しき宗敎が、ローマ帝國を征服する譽れの旗標とはならなかつたらう。

第三節　復活の信仰

（イ）　復活の傳說　吾人は進んで結尾に急ぐ前に、パウロ（Paul）及び其他の福音記者に依つて傳へられた異常なる事變を紹介せねばならぬ。夫れはイエスの復活（Resurrection）である。

玆にアリマテヤのヨセフとて、曩にユダヤ人を懼れて秘かにイエスの弟子となれる者があつた。イエスの屍を取らむと夕方ピラトの許に赴き之を求めた。玆に又ニコデ

ムスといふ屢に夜間イエスの門を叩いて救を乞へる學者があつた。此二人はピラトの許可を得て沒藥と蘆薈とを混じ、凡そ百斤程携へて來てイエスの屍を香と布にて包むだ。さて十字架の近くの園に未だ人を葬れることなき新墓地あり。之れ幸ひと屍を其中に葬り大石もて入口を覆ふて立ち去つた。然るに翌日祭司長やパリサイ人等はピラトの許に到つて告げた。「かの反逆人世にありし時三日の後甦らむと云へり。依つて請ふ三日の間墓を固く守らしめよ。恐らくは彼れの弟子夜來りて之を竊み死より甦りたりと吹聽するならむ。斯くては其禍益甚しきを加へむ」と。ピラトは「汝等に兵卒あれば往つて意の儘に固く守らしめよ」と答へたので、彼等は兵卒を遣して墓を守らしめ且蓋石に堅く封をした。

恰もイエスの死後三日目の朝であつた。突然大なる地震と共に豫言せる如くイエスは復活した。時に天使は降り來つて墓の蓋石を轉がして其上に坐つた。見れば其の容貌は電光の如く、其衣服は白雲の如くであつた。守兵は怖れて顏色蒼然宛も死人のやうになつた。時に篤信の婦人等用意の香物をもイエスの屍に塗らむと來り、石の除かれあるを見て驚き更に墓中を見るに屍もない。婦人等は不審に思ひながら深く悲しめるに石上に坐せる天使は告げて曰く。「汝等懼るゝ勿れ、汝等は十字架上に死せるイエスを尋ねむとて來れるならむも、イエス既に復活して此處に在らず。その置かれし所を見よ。疾く往きて其弟子等に此の由を告げよ」と。婦人等は且つ驚き且つ喜び速に之を告げむと弟子の方へ走り去つた。其時イエスは婦人等に現れて云つた。「心安かれ。去りて我が弟子にガリラヤに往けと告げよ。彼處にて我れを見るべし」と。

之より先きマグダレナのマリヤ(Mary magdalene)は、イエスの死後三日目の朝早く墓に來て、其石が取除かれあるを見、ペテロとヨハネの許に趨り往き、「墓より主を盜み取りし者あり、何處にあるや知れず」と告げた。夫れで二人の弟子は急いで往つて見ると、其首を包むだ手巾は屍を包むだ布と別々に疊まれて置いてある。之れ全くイエスの屍が奪はれしならむと思つた彼等は、悄然と己が宿に歸つた。マリヤは獨

り墓の外に立つて哭いて居ると、忽焉としてイエスは現れた。彼の女は眞逆と思ひ寧ろ園丁ならむと、「汝にても石を移せしや」と訊ねた時、イエスは彼の女の耳に聞き慣れたる聲で、「マリヤよ」と云つたので、直ちに悟つて足下に平伏し「師の君よ」と近よつた。其時イエスは、「我れ未だ我が父に歸らざれば我れに觸るゝ勿れ。とく往きて此由我が弟子に告げよ」といふ言葉の下に、忽ち掻き消すが如く見えんやうになつた。

弟子等は師に別れてより悲哀に掻き暮れて居た所へ、マリヤが來つて事の仔細を告げたるも未だ信ずるには至らなかつた。然るに曩に墓で手巾の別々に疊みあるを見て怪みながら歸つたペテロは、其後間もなくイエスの示現に浴した。そして其日の午後に至つてイエスはエムマウス（Emmaus）に行ける二人の弟子にも現れた。彼等は有りし事共を語りながら道を歩むで居ると、イエスが容を變へて彼等の道連れとなつた。勿論彼等は知る筈がなく普通の旅人であると思つて居た。聽て目ざす村に近づいて

日も暮れたので、三人は共に食卓に就いた。イエスが麵麭を取つて之を祝し裂いて彼等に與へた時に、二人の弟子の目は瞭かになつて初めて其の師なるを識つたが、其時忽然として姿は消え失せた。二人は大に驚いて其夜急ぎイエルサレムに歸つて、斯くと他の弟子等に告げた。彼等はユダヤ人を怖れて堅く戸を鎖ざし、一堂に相集つて其物語を聽いた。此時ペテロに現れた話も出たが、彼等の中には未だ信じないものもあつた。

弟子等は引き續き一室に閉ぢ籠つて密議を凝らして居た。然るにイエスは戸が堅く鎖されてあるにも拘らず、忽焉として彼等の中央に現はれた。「汝等心安かれ、我なり、恐るゝに及ばず」といつたが、彼等は餘りの意外に靈ならむと思つた。そこでイエスは重ねて「我が手と我が足とを見て我れなるを知れ、我れに觸れて見よ、靈は我れの如く肉もなく骨もなし」とて、手足と脇腹とを示したので弟子等は大に喜んだ。併し尙半信半疑の者もあつたので、イエスは炙魚と蜜とを取つて彼等の目前で自ら食

し、殘餘を彼等に頒ち與へて、「汝等聖靈を受けよ」と云つた。此時座に居なかつた十二弟子の一人トマスなる者は、後に之を聞いて、「我は其手の釘瘡を見て其疵に指を差し込み、尙其脇腹に手を入れざれば斷じて信ぜず」と排斥した。然るに其後八日を經て、トマスも偕に居た弟子等に復た現れた。そして特にトマスを召し、「汝の指を伸べて、我が手を見よ、汝の手を伸べて我が脇腹を探れ、斷じて信ぜずと云ふを休めよ」と云つたので、トマスは「我が主なり我が神なり」と驚き怖れて平伏した。イエスは更に言葉を續けて戒めた。「トマスよ、汝は見て信じたれども見ずして信ずる者こそ福なれ」と。

其後イエスはチベリヤの湖畔にて又々弟子に現れた。牧民の職をペテロに授けたるは此時である。イエスは「ヨナの子シモンよ、汝は彼等に優りて我れを愛するか」と三度び繰り返した。そこでペテロは「主よ、主は何事も知らざる所なし、我れの主を愛するは疾より知り給ふ所なり」と答へた。よつてイエスは「シモンよ、我が羔を牧せよ、我が羊を牧せよ」とて、實際基督教會の總牧の重職を授けた。羔は信徒を指し羊は牧師を意味する言葉である。慈くて曩に其母マリヤをヨハネに託したイエスは、今やペテロにクリストの配偶と稱せらるゝ教會を託したのであつた。

イエスは斯く屢弟子に現れて敎を說き、教會の基礎を築きたるが、復活後四十日目に現れたのが其の最後であつた。此時イエスは弟子に向つて、「汝等聖靈の降臨を待つべし」と宣べ、最後の遺訓を語り畢つて彼等を橄欖山に導いた。そこで彼は手を提げて彼等を掩祝し、之が最後の訣別なりとて彼等の面前にて見る〳〵天に昇つた。やがて雲が下つて來て遮つたけれども、彼等は尙も天を仰視して居た。と白衣を着けた天使が二人天降りて、「ガリラヤの人々よ、何故天を仰ぎて立てるや。イエスは今天に昇りし如く又再び天降り給はむ」と告げた。此言を聞いて弟子等は拜禮し、イエルサレムに歸つて一堂に集り、日夜祈禱を怠らず、只管聖靈の降臨を待つたといふ。

（ロ）復活の解說　此書の立場からいへば餘り肝要でもない。傳承的復活を長々と

書き立てゝ、多くもない紙數を割愛したことは讀者に取つて聊か符に落ちぬことであらう。併し夫れは玆に說かむとする吾人の考察には缺く可らざる豫備知識である。以下直ちに考證に入らう。

說明の便宜上結論を前に述べると、吾人の今日知り得たる然も動かす可らざる史的事實は恁うである。イエスの捕縛、處刑は弟子等の期待には全くの不意打であつた。彼等は滿腔の希望を囑したメシヤの事業が全然失敗に了つたを見て取り、失望やる瀨なく、倉皇ガリラヤに遁げ歸つた。彼等の中で最も優れた弟子のペテロでさへ、イエスを知らぬと誓つた位である。十字架の傍には只二三の篤信なる婦人が立つてイエスの最後を見屆けたに過ぎなかつた。然るに不思議にも彼等は暫くして再びイエルサレムに集つて熱心なる勇敢なる傳道者となつた。斯かる急激な變動を來したのは何か。それは彼等のイエス復活の信仰である。彼等は十字架に懸けられたイエスが死に打ち勝ち甦つて、一層高き生活に入り、今も猶生きて居ると確信したのである。即ち肉體的復活ではなくて靈的復活の信仰であつた。

さて此の如き信仰問題解決の材料と見るべき記錄は、福音書とパウロの書翰とであるが、兩者のみならず福音書相互の間にも明瞭な矛盾があつて、說明には最も苦しむのである。そこで第一に起る問題は先づ兩者の一致せざる場合に、何れを採用すべきかといふことである。パウロの第一哥林多書は、福音書の中で最も古い馬可傳よりすら、十數年前に出たものであるから、年代上から見て最も信を措くが至當である從つて吾人はパウロを取つて福音書を捨てるのである。（パウロはイエスを知らないんである、一致しないのはあたり前）

先づ順序として是等の材料が矛盾せる點を指摘しよう。復活せるイエスが弟子等に現れた場所は、馬可傳及び馬太傳によればガリラヤであつた。然るに路加傳には正反對にイエルサレム及び其附近であるのみか、弟子等にイエスがイエルサレムを去るなと命じて居る。そして約翰傳になるとイエルサレムにも現れガリラヤにも現れて居る。パウロの記事に至つては、路加や約翰に甦つた手足にまで觸れしむる肉體的復活

とは全然相容れない。パウロの信仰は後に述ぶる如く此の如き肉體的のものではなかつた。從て彼れが明細に列擧したイエス出現の場合は、一も福音書にあるものと一致し得べきでない。

次に是等の傳承的復活の記事が宗教的想像の産物なるを説明しよう。パウロはイエルサレムの教會から傳へ承けたと特に記して、己が復活の事實に關する記事の誤なきを保證して居る。そして彼れの書翰には、イエスの墓が空虛になつたことは一言も説いてない。イエスの復活の最も有力なる證據たるべき此事實を書いて居ない所より推すと、彼は夫れを傳へ知つて居なかつたに相違ない。又イエルサレムの直弟子等も知らなかつたに相違ない。然るに馬可傳になると明かに記されて居る。つまり時の經過と共にイエスが見えたといふ丈けでは滿足出來ず、甦つたのならば墓は空虛になつた筈であると想像する。然も夫れは誰か死骸を持ち去つた爲めでなくて、誰も持ち去ることの出來ないやうになつて居た筈と推論する。果せる哉、馬可傳によると復活の朝墓に參詣した婦人等は墓の口を蓋うた大石が側に轉がつて居るのを發見したとある。然るに又時の立つに伴つて、人の居ない間に誰か石を轉がして屍を盗み出したのではあるまいかとの懸念が湧いて來る。果せる哉、馬太傳になると、番兵が側に居て然も其目前で地震が起つて石が轉がり出したと記されて居る。此の如く宗教的想像は信仰より割り出して、後に出來た福音書ほど新たな事實を附け加へて居る。

最後に解決すべき根本問題は、イエスが如何に弟子等に現れたかである。福音書の記事を信ずる人々は、イエスの死骸が再び生命を得て、自ら墓を出て、肉體的に然も半ば幽靈然たる姿で弟子等に現れたと考へる。恁かる純粹の奇跡を信ずる所謂超自然論者の誤れるは説明を俟つまでもあるまい。又反對に此考の餘りに怪談的なるを好まず、然も福音書の記事を棄てることの出來ない人々は、イエスは實は死んだのでなくて一時氣絶したのみであると説いて居る。此の如き合理的説明より出立せる所謂假死説は全然排斥すべきである。そこで問題は福音書の記事を如何なる程度まで信ずるか

にある。前にも述べた如く、吾人はパウロを標準として福音書の記事を批判せねばならぬ。さてパウロが轉心の經驗を言ひ顯はすに、「神其子を我れに於て啓示したり」といふ語を用ゐて居る。吾人は此の「我れに於て」なる句に問題を解決する鍵を發見するのである。之は明かに彼れの經驗が內的精神的のものであつたことを證明して居る。殊に彼れが復活後のクリストを如何に考へたかを知れば一層明瞭になる。彼れに取つては、復活したクリストは肉即ち地上の物質と正反對なる靈であつた。既にパウロにして、己が靈的經驗をペテロ以下の經驗と同列に擧げて、イエス復活の證據として居る所より見れば、他の人々の經驗も彼れのと同種類のものであつたことは疑ひもない。恁く論じて來ると、ペテロ其他の人々も、彼れと同樣に內的精神的にイエスを見たに相違ない。彼等は心眼を以てイエスを見たので、己が手足を觸れしめたり、炙魚を食つた肉體的のイエスではなかつた。肉體的復活は事實でない。要するに吾人の問題は最早イエスが歷史的事實として果して復活したりや否やといふに非ずして、復

活の信仰が如何にして弟子等の心に起り得たりしや。又後世の基督敎徒の信仰思想に如何なる意義を有し、如何なる感化を及ぼせしかといふに在る。

吾人は玆に結論に達した。弟子等は一時散亂し、ガリラヤに遁げ歸つたのであるが追々と師の在りし昔を偲び其偉德を想ふにつれて、深く悔ゐ、其極心眼に師の再現を見るに至つたのである。かくて復活の信仰は彼等をして使徒たらしめた。即ち來らむメシヤと神の國との福音を傳ふる傳道者たらしめたのである。此天職を實行せむため、彼等はイエルサレムに上つて猛烈なる活動を開始した。其熱誠に打たれて即座に悔い改めた者は數千人の多きに達した。恁くて遂にペテロは眼界を廣くして異邦人にまで傳道するやうになり、此宗敎は世界に傳播し以て今日に及んだのである。

——終——

版權所有

史的研究 赤裸々の基督
定價金一円四十錢

大正八年十二月十日印刷
大正八年十二月十五日發行

著者 大野法瑞
東京市神田區裏神保町六番地

發行兼印刷者 株式會社 右文館
右代表者 橋本恒之

印刷所 東京印刷製本株式會社
東京市小石川區西江戸川町二十一番地

發行所
株式會社右文館
東京市神田區裏神保町六番地
電話神田三七六七・振替東京四七五七〇

東京帝國大學
助教授文學士 深作安文先生新著

外來思想批判

四六判美裝全一冊
定價金一圓二十錢
送料金六錢

最新版

曩古の世界大戰は局を結べりと雖も現代思潮は滔々として世界全土を其の過中に卷込まんとし思想界の激動今日其の極に達す何人か出でゝ指導するなくんば極東の島帝國將に憂ふるところあるべし。讀め。有識の士、著者の穩健深切なる批判を。以て外來思想に對する態度を速に決せよ。

東京神田區
裏神保町六
株式會社 右文館
電話神田
三七六七

振替口座東京四七五七〇番

文學博士大類　仲先生新著

世界大戰概史

ポケット型全一冊
定價一圓四十錢
送料六錢

最新版

曠古の世界大戰の經過を知らんとする士は本書に依られよ
斯學の泰斗大類博士獨得の麗筆により成れる本書は世界大
戰の最初より講和會議後迄の縮圖とも云ふべく錯綜を極め
たる世界大戰を能ふ限り大觀せられたるもの何人も必讀の
良書裝釘亦輕快車上にポケットに携へて至便なり

東京神田區
神保町六
株式會社
右文館
電話神田
三七六七

振替口座東京四七五七〇番

392
65

終